

## 明治期のイソップ寓話集類——概要——

吉見 孝夫

### 一 対象とするイソップ寓話集の範囲

明治期はイソップ寓話が急速に国民的常識となつていった時代である。その普及のルートとしては、①イソップ寓話集、②その他の寓話集などの図書、③修身・国語・英語の教科書、④新聞・雑誌類がある。②④のルートの概略は既に公表した<sup>注一</sup>。この小論では①のイソップ寓話集を対象とする。日本語によるイソップ寓話集は、筆者の調べた範囲でも明治期に二十余に上る。ここではそれに加え、その原本である外国語のイソップ寓話集、日本で発行された外国語によるイソップ寓話集も取り上げる。寓話集とは呼べない、初級段階の単なる英語教科書・学習参考書も、教材のほとんどがイソップ寓話であれば、ここに含めた。小論ではそれらを紹介することに主眼をおき、解明できた範囲で寓話集相互の關係に言及する。明治期イソップ寓話集を網羅的に扱った論考はないと思われるので、これだけでも公表する価値はあろう。また、専門家にも知られていない寓話集もいくつか取り上げたつもりである。小論を基礎にして、翻訳史上、文体史上の意義等について考察される論考が現れることを期待している。

なお仮名草子「伊曾保物語」を翻刻した図書は、ここでは対象外とする。その一つである大久保夢遊や竹村友治郎の編になる『伊曾保物語』については既に論考を公にしている<sup>注二</sup>。

以下に対象としたイソップ寓話集を時系列に沿って示す。シリーズ物で一部大正期にかかる文献もある。

一八四〇年

(『意拾喻言』)

一八四八年

T. James: *Aesop's Fables*

一八五三年

この頃『伊婆菩喻言』

一八六三年

T. James: *Aesop's Fables* (渡部温の依拠本)

一八六七年

G. F. Townsend: *Three Hundred Aesop's Fables*

明治五年 (一八七二)

渡部温『英文伊蘇普物語』*Aesop's Fables*

六年 (一八七三)

渡部温『通俗伊蘇普物語』(四月)

福沢英之助『訓蒙話草』(一二月)

九年(一八七六)

阿部弘国『漢訳伊蘇普譚』(一〇月)

一二年(一八七九)

中田敬義『北京官話伊蘇普諭言』(四月)

二一年(一八八八)

田中達三郎『寓意勸懲伊蘇普物語』(三月)

渡部温『改正増補通俗伊蘇普物語』(一二月)

渡部温『改正増補通俗伊蘇普物語原書』 *Aesop's Fables*

C. Stickney: *Aesop's Fables*

二四年(一八九一)

渡辺松茂『家庭教育小学脩身はなし』(一二月)

渡辺松茂『家庭教育幼年脩身はなし』(一二月)

二五年(一八九二)

鈴木青溪『新訳伊蘇普物語』(五月)

三〇年(一八九七)

栗野忠雄『伊蘇普物語直訳講義』(四月)

三一年(一八九八)

前田儀作『漢訳批評伊蘇普物語』(七月)

三二年(一八九九)

元木貞雄『伊蘇普物語直訳講義』(八月)

積善館: *Aesop's Fables* (九月)

三四年(一九〇一)

C. M. Cady: *The Series-Form of Aesop's Fables Part I*

C. M. Cady: *The Series-Form of Aesop's Fables Part II* (七月)

関貢米: *Stickney's Aesop's Fables* (一〇月)

三五年(一九〇二)

西村醉夢『少年世界文学第五篇イソップのはなし』(一二月)

二

三六年(一九〇三)

河島敬蔵『英文伊蘇普物語註釈』(一月)

鐘美堂: *Aesop's Fables with Illustrations* (一月)

三七年(一九〇四)

C. A. Parry: *Fables from Aesop in Short Sentences* (七月)

四〇年(一九〇七)

上田万年『新訳伊蘇普物語』(一月)

雨谷一菜庵『イソップ物語』(二月)

佐藤潔『正訳伊蘇普物語』(一二月)

四一年(一九〇八)

百島操『イソップ物語』(一二月)

四二年(一九〇九)

中村徳助『新訳解説伊蘇普物語』(二月)

四三年(一九一〇)

吉田潔『独学自修イソップ物語』(三月)

西片寒川『教訓叢話イソップ物語』(四月)

英語研究社『イソップの話』(六月)

中川柳涯『ポケット伊蘇普物語』(一〇月)

馬場直美『ポケット新訳イソップ物語』(一月)

普光社『英文イソップ物語』 *Fables from Aesop and Others*

四四年(一九一一)

西垣堯則『伊蘇普物語二百話』(一月)

稲葉翠浪『新式イソップものがたり』(四月)

鈴木正士・杉山孫之助『第二イソップの話』(六月)

菅野徳助・奈倉次郎『伊蘇普物語 一』(八月)

巖谷小波『イソップお伽噺』(八月)

宝文館: *New Selections from Aesop's Fables* (一〇月)

大正二年(一九一三)

鈴木正士・荒井克成『第三イソップの話』(二月)

菅野徳助・奈倉次郎『伊蘇普物語 二』(十一月)

以上のイソップ寓話集をその依拠した原本によって系統を分類すると、以下ようになる。

① Thomas James: *Aesop's Fables* 系

② George Fyler Townsend: *Three Hundred Aesop's Fables*

系

③ 『伊蘇普諭言』系

④ Charles Stickney: *Aesop's Fables* 系

⑤ その他

ただし、複数の系統に渉る寓話集は便宜的にいずれかに分類した。次節以降に、系統に分けて各寓話集の概略を記す。

## 二 Thomas James: *Aesop's Fables* 系

### Thomas James: *Aesop's Fables*

Thomas James (一八〇九〜一八六三) による英語のイソップ寓話集。寓話本文の前に Introduction to the Life and the Fables of Aesop、List of Illustrations が付き、巻末

に Index (寓話タイトルをアルファベット順に列記) がある。全二〇三話。John Tenniel (一八二〇〜一九一四) と Joseph Wolf (一八二〇〜一八九九) の挿絵がつく。

版により挿絵は多少の差異がある。挿絵については三宅興子の論考が詳しい<sup>注三</sup>。ロンドンの John Murray 社から一八四八年に刊行されて以降、版を変えて何度か出されている。またともにニューヨークの出版社である Grosset & Dunlap と Platt & Peck から出されている。

渡部温が『通俗伊蘇普物語』に利用したのは John Murray の一八六三年版。初版と一八六三年版とは、①口絵が異なる、②寓話の掲載順が異なる、③挿絵四一図につき修正を施している、といった差異がある。

### 渡部温編『英文伊蘇普物語』 *Aesop's Fables*

Thomas James の *Aesop's Fables* 一八六三年版の英文のままの翻刻。全二〇三話の掲載順も原本のまま。徳川家が維新後沼津に設立した兵学校の教員であつた渡部温<sup>わたなべ ぬるみ</sup> (一八三七〜一八九八)<sup>注四</sup>が講義で使う英語教科書とするために刊行した。乾坤二冊からなる和装本だが横書きのため左綴じ。明治五年(一八七二)沼津で渡部自身が発行した。

文部省の『准刻書目』(明治五年六月)に「原書ハ千八百六十三年倫敦ニ於テ發兌イソップスノ譬話諭言ヲ英人トマス、ゼアメス、エム、エ英文ヲ以テ訳セシナリ」<sup>注五</sup>とあり、John Murray 社の一八六三年版が原本である。ちなみに「エム、エ」は M.A. 即ち Master of Arts である。

表題の「伊蘇普物語」には「イソップスファアブルス」とルビが付されている。見返しにイソップの肖像 (THE PORTRAIT OF AESOP)、扉にイソップが人々に話を語っている場面の絵がある。筆者が見た範囲では James 本にイソップ肖像のある版はない。また原本のままに WITH MORE THAN ONE HUNDRED ILLUSTRATIONS DESIGNED BY JOHN TENNIEL と付記されているが、実際には挿絵は省略されている。続いて INTRODUCTION TO THE LIFE AND FABLES OF AESOP・CONTENTS・寓話本文で構成されている。寓話番号、寓話タイトルを除いてはすべてイタリック体。印刷には嘉永三年 (一八五〇) に出島のオランダ商館長が將軍徳川家慶に献上したスタンホープ印刷機と活字を用いている。原本は、幕府によってイギリスに留学した外山正一が帰国に際して携えたのを旧幕府の開成所の同僚渡部が借り受けたものである。

以下原本との主な相違を示す。

1 原本にはないイソップ肖像がある。ただし、これは新たに描いたのではなく、原本の扉にある、イソップが聴衆に語りかける図の中のイソップの頭部を抜き出し、左右を反転させたものである。

2 原本の、イソップが聴衆に語りかける図を一部簡略化した形で載せる。

3 INTRODUCTION TO THE LIFE AND FABLES OF AESOP の後半部を省略する。

4 原本の巻末にある Index (寓話タイトルのリスト)

を、CONTENTS として本文の前に置く。

5 原本にある寓話中の挿絵はすべて省略する。それ故原本では本文の前にある LIST OF ILLUSTRATIONS も省く。

6 原本では通常の印刷書体である本文活字をイタリック体にする。

#### 渡部温訳『通俗伊蘇普物語』

文部省の『准刻書目』(明治五年六月)に「原書ハフアーブルスト名ヅクル書ニテ英人トマス、ゼアメス、エム、エ英文ヲ以テ訳セシヲ国字ニテ訳ス」<sup>注六</sup>とあり、Thomas James の *Aesop's Fables* の翻訳。ただし他本からの翻訳も含まれる。全二三七話。渡部が利用したのは、前項『英文伊蘇普物語』に記したように、外山正一がもたらした John Murray 社の一八六三年版である。全六巻六冊で、巻三までは明治六年 (一八七三) 四月に、巻四以降は同年暮れに刊行する。いずれも渡部自身の手になる出版である。整版の和装本。

巻一には藤沢梅南の漢文の「序」、イソップが聴衆に語りかける口絵 (BYNAN 即ち梅南のサインがある)、「伊蘇普肖像」、「伊蘇普小伝」、「例言」がある。各巻「目錄」が本文の前に付く。口絵、肖像は『英文伊蘇普物語』のそれと類似するが、小異がある。巻三までは James 本から一三三話を選んで、原本の掲載順に従って載せる。

巻四、五は James 本の残りの七〇話を、これも原本の掲載順に配列する。巻六は George Fyler Townsend の *Three*

*Hundred Aesop's Fables* からの二六話の訳と、仮名草子『伊曾保物語』からの八話の改変から成る。

「例言」に「此度予が訳述せし此伊蘇普氏の寓言譬喩は、徳教を婦幼に説示す徑捷にて。いかなる村童野婦といへども。其事理を解し易き事。恰も我邦の落語に異ならず。故に今其訳言をも易解を主旨として。原文の意に随つ。俗言俚語にて書取たり。」と謳っているのに違わず、文語、口語、江戸言葉ないまぜの訳文は奔放自在、面白さにおいて当時の翻訳文の中で群を抜いている。後続のイソップ寓話集の訳文に与えた影響も大きい。渡部はイギリスの経済学者 Richard Whately の *Easy Lessons on Money Matters* を英文のままに翻刻した『経済説略』という書を出版しており、第五話「蟻と蟲蠱の話」と第三五話「胃腑と支体の話」の訳出に当たっては、この書を参考にしている。

三二話に三三図の挿絵が付いている。James 本を原本とする巻五までのうち三図は榊篁邨、七図は藤沢梅南、一九図は河鍋曉斎の筆である。篁邨、梅南による図は原本の模写に近い。一方曉斎のは原本に基づきつつも独自性が見られる。巻六の四図は曉斎のオリジナルの絵である注七。

明治八年の後印本がある。初版とほとんど変わらないが、ルビに相違がある。また初版の第八話「鷲と狼の話」では原文の *kid* を *kite* と誤読しているが、後印本では「羔と狼の話」と訂正している。ただし本文中では訂正し忘れもある。

明治一二年には中田敬義に本書を中国語に翻訳させた『北京官話伊蘇普喩言』、明治一二年には収録語数を増やした『改正増補通俗伊蘇普物語』を渡部は出している。本書については平凡社刊の『通俗伊蘇普物語』(二〇〇一年九月)中の谷川恵一執筆の「解説」が詳しい。

#### 中田敬義訳『北京官話伊蘇普喩言』

『通俗伊蘇普物語』の二三七話を掲載順もそのままに北京官話に翻訳したもの。出版人は渡部温、明治一二年(一八七九)四月刊。訳者中田敬義注八による「小引」(一八七八年六月)、イギリス人艾約瑟 (Joseph Edkins) の「序」(同年四月)、英紹古の「序」(同年四月)、アメリカ人丁韋良 (William Martin) の「喩言序」(同年四月)、「伊蘇普小伝」、二つの「例言」がある。そのうち「小引」と「例言」の一つは日本語だが、他は漢文である。その後に「目録」と本文が続く。寓話タイトルはすべて漢字四字から成る。英紹古は中田の中国語の師である。翻訳に当たっては英紹古の息子英恩禄の手も借りている。本書の影印・解説が内田慶市『漢訳イソップ集』(ユニウス、二〇一四年二月)にある。

「小引」に翻訳に至った事情が記されているので、その部分を引用しておこう。「明治九年外務省ノ命ヲ奉シテ北京ニ赴ク、発スルニ臨ミ、渡部君余ニ囑スルニ伊蘇普物語ヲ支那語ニ繙訳スルヲ以テス、余首肯、北京ニ抵ル以来、孜々繙訳、今甫メテ稿ヲ脱ス、印刷ノ後、語学者ノ小補ト為レハ、幸甚。」

『改正増補通俗伊蘇普物語』中の本書の広告にも同様の記述がある。併せてその宣伝文を示しておく。「此書ハ渡部温先生ノ通俗伊蘇普物語ヲ支那語学ニ有名ナル中田敬義氏ガ北京駐在中ニ北京語ニ訳サレタル者ニシテ。北京語ヲ学フ者ニハ尤適當ナル階梯ノ書ナリ。」

東京外国語学校で中国語を学んでいた中田は北京公使館に派遣されることとなった。その際に校長の渡部温から『通俗伊蘇普物語』を中国語の教材として翻訳することを依頼されて承諾し、北京滞在中にそれを完成させたというわけである。

中田敬義（一八五八—一九四三）は金沢に生まれ、日清戦争の下関講和会議にも出席した外務官僚。榎本武揚、陸奥宗光の二人の外務大臣の秘書官として仕え、政務局長を最後に退官している。中田については六角恒廣『漢語師家伝 中国語教育の先人たち』（東方書店、一九九九年七月）が詳しい。

### 渡部温訳『改正増補通俗伊蘇普物語』

訳文を一部手直しし、話数を増補した『通俗伊蘇普物語』の改訂版。巻末に広告が掲載されており、その中に本書自体の広告もある。その宣伝文を示しておく。「但寓言二百八十題。挿画百十八葉。紙数三百五十ページ。此書ハギリシヤ国ノ古哲イソップ先生ノ寓言ヲ。村童野婦ニモ解シ易キ様俗文ニテ訳シタル者ニシテ。小学ノ修身教話ニ適當ノ書ナリ。」挿絵は一二三話につき一三五図あり、「百十八葉」とあるのは不可解である。「三百

五十ページ」というのは、序から目録までの三六ページと本文三一三ページに奥書一ページを加えたものか。藤沢梅南の漢文の「序」、「伊蘇普肖像」「伊蘇普小伝」「改正増補例言」「目録」「本文」から成る。「序」「伊蘇普肖像」「伊蘇普小伝」は『通俗伊蘇普物語』と変わらな。奥書に「翻訳兼発行人 渡部温」とあり、渡部自身による明治二十一年（一八八八）一二月の刊行。

話数は二三七話から二八〇話に増補される。第一話から第二〇三話までは James 本の翻訳。掲載順を James 本のとおりに変更する。第二〇四話から第二七三話までは Townsend 本から七〇話を選んでの翻訳。七〇話中二六話は『通俗伊蘇普物語』を受け継いだもので、四三話は新たに翻訳し増補したもの。残る一話、第二二一話「牝<sup>をんな</sup>猿と子猿の話」は原拠を仮名草子『伊曾保物語』から Townsend 本に換えている。第二七四話から第二八〇話までの七話は仮名草子『伊曾保物語』から採る。『通俗伊蘇普物語』では八話あったが、上述の第二二一話の差し替えがあるので一話減っている。

訳文は『通俗伊蘇普物語』を多少改める。表題の改変だけをここに示しておく。括弧内は『通俗伊蘇普物語』での表題。

- 第九二話「蝮蛇<sup>まむし</sup>と鑢<sup>やすり</sup>の話」（盗賊<sup>とうぞく</sup>と鑢<sup>やすり</sup>の話）
- 第一四七話「童児<sup>こども</sup>と榛<sup>はしばみのみ</sup> 実<sup>こと</sup>の話」（童児<sup>こども</sup>と榛<sup>やまぐりのみ</sup> 実<sup>こと</sup>の話）
- 第一五七話「狐<sup>こ</sup>と鶴<sup>こう</sup>の話」（狐<sup>こ</sup>と鶴<sup>こう</sup>の話）
- 第一六九話「湖水<sup>こすゐ</sup>に立た鹿<sup>か</sup>の話」（谷川<sup>やがわ</sup>に立た鹿<sup>か</sup>の話）
- 第二〇五話「妻<sup>つま</sup>と召仕<sup>めしつかひ</sup>の話」（新婦<sup>よめ</sup>と召仕<sup>めしつかひ</sup>の話）

第二〇九話「鹿と狼と羊の話」(鹿と羊の話)

第二一〇話「猿と旅人の話」(旅人と猿の話)

第二一六話「日傭夫と蛇の話」(農夫と蝮蛇の話)

第二二一話「牝猿と子猿の話」(牝猿と犬の話)

第二二七話「鵜柴奴と囃の話」(鵜柴奴の話)

このうち第九二・一五七・二〇九・二一六話の原タイトルは以下のとおりであり、原文の忠実な訳に変えたことがわかる。

第九二話 The Viper and the File

第一五七話 The Fox and the Stork

第二〇九話 The Stag, the Wolf, and the Sheep

第二一六話 The Labourer and the Snake

挿絵は一二三話について一二五図見られる。『通俗伊蘇普物語』のは採用せず、すべて新たに描いたものに換えている。James 本に拠った部分では、九八話に一〇九図の挿絵があり、すべて James 本の模写である。絵の多くに「K.T.」のサインがある(一つは「K.M.Tatebe」)。Townsend 本に拠った部分では二〇話に二〇図ある。このうち第二二五話「狼の医術の話」、第二四五話「馬と騎馬武者の話」、第二五一話「太子と絵の獅子の話」の挿絵は Townsend 本に基づくことが明らかだが、他は原拠があるのかオリジナルなのか不明である。仮名草子『伊曾保物語』に依拠した部分では五話につき六図ある。万治二年整版本の絵とは全く無関係で、ヨーロッパ風の絵柄である。第二七七話の図は河鍋曉斎の『通俗伊蘇普物語』中の挿絵に基づいているが、他は不明。Townsend

本、『伊曾保物語』に拠った第二〇四話以降の挿絵にはサインがない。

なお第二〇六話は Townsend 本の THE ASS AND HIS PURCHASER の翻訳であるがタイトルは「馬と買客の話」となっている。この齟齬については次項『改正増補通俗伊蘇普物語原書』を参照されたい。

渡部温編『改正増補通俗伊蘇普物語原書』*Aesop's Fables*

英語のインソップ寓話集の英文のままの翻刻。明治二一(一八八八)年、東京渡部温刊。国会図書館蔵本の書誌情報に「一八八〇年刊」とあるのは誤りである。

『改正増補伊蘇普物語』中に本書の広告がある。その宣伝文を示しておく。「此書ハ英国技芸士トマス、ゼームス氏ガ。インソップ先生ノ寓言ヲギリシヤ文ヨリ英文ニ翻訳セラレタル者ニシテ。渡部温先生ノ訳述セラレタル通俗伊蘇普物語ノ原書ナリ。彼此対照セバ英文解説ノ便ヲ得ベシ。」「技芸士」は Master of Arts の訳である。ただし、書名のとおり『改正増補通俗伊蘇普物語』の英語版なので James 本だけではなく Townsend 本も含まれる。James 本部分についてみれば、明治五年の『英文伊蘇普物語』の改訂版ともいえる。

表紙に、明治五年版と同じインソップが聴衆に語りかける図を載せる。

扉には以下の英文を記す。

ÆSOP'S FABLES: A New Version/CHIEFLY FROM  
ORIGINAL SOURCES./BY THOMAS JAMES,

M.A./HON.CANON OF PETERBOROUGH/EDITED WITH  
EXTENSIVE ADITIONS/BY T.WATANABE/WITH 118  
ILLUSTRATIONS/TOKYO/21ST YEAR OF MEIJI.

扉ウラにイソップの肖像を載せる。明治五年版と同様に表紙のイソップを左右反転させたものである。ただし明治五年版では THE PORTRAIT OF AESOP とあったタイトルが AESOP. とだけある。

続いて James 本の INTRODUCTION TO THE LIFE AND FABLES OF AESOP を収める。明治五年版と異なり、省略はない。

続く本文は全二七三話。第一話から第二〇三話までが James 本の寓話の掲載順も原本どおりの翻刻。第二〇四話から第二七三話までが Townsend 本の翻刻。つまり『改正増補伊蘇普物語』の第二七三話までの原本の英文をそのまま載せたものである。ただし後述するとおり、第二〇六話はタイトル、本文が原本とは小異がある。また第二二四話と第二二六話を取り違えている。掲載の絵はすべて『改正増補通俗伊蘇普物語』と同じ。巻末にアルファベット順の INDEX を加える。

第二〇六話はタイトルが THE HORSE AND HIS PURCHASER. で、本文で登場するのも horse である。ところが原本の Townsend 本では、タイトルは THE ASS AND HIS PURCHASER. であり、登場するのも ass である。渡部が ass を horse に変えたのだが、その理由是不明である。『改正増補通俗伊蘇普物語』では horse に従った訳になっている。

本書と『改正増補通俗伊蘇普物語』の寓話掲載順は一致するはずであるが、第二二四話と第二二六話は入れ替わっている。これは両話のタイトルがいずれも THE FOX AND THE MONKEY. (原本の Townsend 本でも同様) であるために、混乱を来したものである。

### 三 George Fyler Townsend: *Three Hundred Aesop's Fables* 系

George Fyler Townsend: *Three Hundred Aesop's Fables* ギリシア語からの英訳本。Three Hundred とあるが、正確には三一三話。Harrison William Weir の挿絵が付いている。ロンドンの George Routledge and Sons 刊の一八六七年版が初版と思われる。日本へは確認される範囲では英国へ留学した福沢英之助が慶応四年(一八六八)に持ち帰ったのが最初。イソップ寓話としては明治期には最も多く翻訳された。

Townsend 本は多くの版があり、George Routledge and Sons の以下の三つの版は明治期に日本にもたらされたことがはっきりしている。本文に変わりはないが、寓話の掲載順、挿絵の数は異なる。

T<sub>1</sub>: 一八六七年刊。一九二ページ 五〇図

田中達三郎訳『寓意勸懲伊蘇普物語』の原本。雨谷一菜庵訳『イソップ物語』、百島操訳『イソップ物語』の原本と思われる。

T<sub>2</sub>: 一八六七年刊 一二四ページ 一一四図

福沢英之助訳『訓蒙話草』の原本と思われる。渡辺松

茂の『家庭教育小学脩身はなし』『家庭教育幼年脩身はなし』(鈴木青溪『新訳伊蘇普物語』、鐘美堂編の *Aesop's Fables with Illustrations* が利用したと思われる。

T. : 一八九九年以前刊 一二六ページ 五〇図

積善館 : *Aesop's Fables*、河島敬蔵『英文伊蘇普物語註釈』の原本。

その他以下の出版社からも刊行されている。

The American News Company

Clarke

Donohue Brothers

Grant Richards

Hodder & Stoughton

McLoughlin Brothers

以下一八六七年刊かと思われる一九二ページ本に従ってその概略を示す。

扉には以下のようにある。

THREE HUNDRED/AESOP'S FABLES/LITERALLY  
TRANSLATED FROM THE GREEK/BY THE/REV.  
GEO.FYLER TOWNSEND, M.A./With fifty Illustrations by  
Harrison Weir (一八六七年刊の一二六ページ本では With  
以下は WITH ONE HUNDRED AND FOURTEEN  
ILLUSTRATIONS./DESIGNED BY HARRISON WEIR  
AND/ENGRAVED BY J.GREENAWAY)

本文の前に二四ページに及ぶ Preface、四ページの Life of Aesop と List of Illustrations が付く。巻末には寓話タイトルをアルファベット順に並べた Index がある。他の

Routledge 版も構成は同じである。

George Fyler Townsend (一八一四〜一九〇〇) は、聖職者である一方、アラビアンナイトの訳書などいくつかの書籍を出版している。Harrison William Weir (一八二四〜一九〇六) は挿絵画家として活躍している。

福沢英之助訳『訓蒙話草』

上下の二巻二冊。刊記はなく、自序に明治六年(一八七三)一二月の日付がある。Townsend 本から九一話を選んで訳す。上巻は「訓蒙話草序(自序)」・「目録」・本文から成る。「目録」は下巻部分も含む。下巻は本文のみ。自序に「先年英国へ留学セシ時此原書ヲ得タルユヘ早クモ之ヲ翻訳シテ世ニ出サント欲シタレトモ学業開シクシテ止ミシガ今漸ク余暇ヲ得テソノ宿志ヲ遂グルヲ得タリ」とあつて、その原書が何かは示していないが、Townsend 本である。「先年英国へ留学」というのは、幕府による慶応二年(一八六六)の留学。この留学生の中には James 本を手に入れた外山正一もいる。漢字片仮名交じりの文語体。和装本。

忠実な翻訳ではなく、ときに原文の内容を変える、あるいは新たに話を付け加えるといった加工を施し、さらに教訓や解説を付加する。内容を変えた例、話を付け加えた例を一つずつ挙げておく。第四二話「病鹿ノ話」の原話は Townsend 本の THE SICK STAG で、病気の鹿が見舞いに来た仲間の鹿に食物を食べられて餓死する話である。ところが福沢本は仲間の鹿が持つてきた食物を食

べ過ぎて病気の鹿は死んでしまうという、死因が全く逆の話になってしまっている。第六七話「木像ト大工ノ話」は Townsend 本の THE IMAGE OF MERCURY AND THE CARPENTER の翻訳である。原文は神像を叩き割ると中から金が出てくるという話だが、福沢は末尾に「其後はレ迄費シタル二三時間ヲ働ニ込メテ大ニ勉強シケレバ次第二富ヲ増シタリトゾ」という後日談を加える。

福沢が持ち帰った Townsend 本は、掲載順と挿絵の点から Routledge 一八六七年刊の二二四ページ本かと思われる。両者の寓話の掲載順が第一話から第七話までは完全に一致する。それ以降は本書に掲載されなかった寓話を除けば、第一四話までとは掲載順が一致する。第三三話まででは第一五・一六・二八話を除くと、掲載順は一致する。それ以降は大分食い違う。とはいえ他版と一致するわけではない。

本書には三五図の挿絵がある。これらはすべて Weir の絵の模写である。Townsend 本は版により絵の数が違う。一九二ページ本は三五図中では一六図しか載せていない。一方二二四ページ本は三五図すべてを掲載している。二二四ページ本が底本だとすると選択した九一話の挿絵はすべて取り込んだことになる。

福沢は本名和田慎次郎、中津藩出身。同郷の福沢諭吉が留学の便宜のために、偽名を使わせ自分の弟と称させた。後に慶應義塾員ともなる。

田中達三郎訳『寓意勸懲伊蘇普物語』

木村多喜刊行の明治二年（一八八八）三月刊の初版と、後の有斐閣版がある。初版の表紙・扉には「寓意勸懲伊蘇普物語」とあるが、内題は角書きが「寓意勸懲」となっている。内題の下に「希臘 伊蘇普原題／英国 都運箋士直訳」とあり、Townsend 本の全訳。若菜胡蝶園の校正。目録・本文のタイトルの下にいちいち原書のページ数を示している。これに照らし合わせると Routledge の一九二ページ本に依拠していることがわかる。寓話の掲載順も底本のとおりに。全三一三話。土居通予（香国）の漢文の序、田中による「例言」を載せ、次に原書の The Life of Esop を抄訳した「伊蘇普の伝」、「目録」を本文の前に配する。地の文は文語体だが、会話及び各話末尾の寓意の文は口語体。原本から挿絵一二図を選んで載せている。

有斐閣版は表紙を、新たに作成した「兎と亀の話」の絵で飾っていて、「Æsop's Fables / 伊蘇普物語」とある。土居の序は削除されている。本文は初版と同一。

訳者田中達三郎に関しては不明。校正として名が挙がっている若菜胡蝶園（一八五四～一九一八）は戯作者で、経歴から見て英語に通じていたとは思われない。実際に「校正」をしたならば、訳文を読みやすくするために手を貸したということであろう。確かに本文には英語原文を離れた戯作めいた面白さが認められる。リプリント近代文学二〇四『伊蘇普物語』（国文学研究資料館、二〇一二年一月）に谷川恵一による「解題」がある。

渡部温の『通俗伊蘇普物語』からの影響については【補

論一】を参照されたい。

### 積善館編：Æsop's Fables

Townsend 本を英語のまま日本で翻刻し出版したものである。表紙には以下のタイトルがある。

Æsop's Fables / TRANSLATED FROM THE GREEK BY  
GEO.FYLER TOWNSEND M.A.

原書には多分あつたであろう Three Hundred の語句がない。Faithful Reprint と銘打ち、Preface も Life of Æsop も省かず、全三二三話を収録する。ただし挿絵はすべて省かれてゐる。明治三二年（一八九九）九月、大阪の積善館刊。

Townsend 本にはいくつかの版があるが、一二六ページ本と寓話の掲載順が一致する。一二六ページ本が最初について刊行されたのかは不明だが、この翻刻が一八九九年刊なので、それ以前ということになる。

中学校の英語教科書として出版されたのであろう。次項の『英文伊蘇普物語註釈』という英語参考書があることとわかるように、Townsend 本は中学英語教科書として利用されていた。

### 河島敬藏『英文伊蘇普物語註釈』

Townsend 本の註釈書。冒頭に「イツプの略伝」がある。この略伝の末尾に三行ほどの自序を加える。本文は横書きだが、この略伝部分は文語体の縦書きで左から読む体裁になっている。続いて英文全三二三話を収録し、

その後にまとめて註釈部分がある。註釈部分は口語体、文語体が混じてゐる。Townsend 本の中では一二六ページ本と寓話の掲載順が一致する。大阪の浜本明昇堂、明治三六年（一九〇三）一月刊。

本書については岩男久仁子「河島敬藏『ÆSOP'S FABLES 英文伊蘇普物語註釋』の解題」（『桃山学院年史紀要』第三十六号、二〇一七年三月）が詳しい。

### 雨谷一菜庵訳『イソップ物語』

吉川弘文館、明治四〇年（一九〇七）年一二月刊。原書が何か明記されていないが、Townsend 本の全三二三話の翻訳である。Townsend 本の諸版のうち一九二ページ本と第七九話までは掲載順が一致する。それ以降も概ねは一致する。第八〇話以降は雨谷が意図的に順を変えたのか、あるいはこの通りの Townsend 本があるのかは不明。原書には冒頭にあつた「イソップ伝」を寓話の後に置く。「イソップ伝」に続いて「イソップ物語自序」「訳者の希望」を載せる。ほぼ総ルビの敬体の口語文。雨谷訳は田中達三郎訳よりもずっと原文に忠実である。田中訳と直接的な関係は認められない。リプリント日本近代文学二〇五『イソップ物語』に谷川恵一による「解題」がある。

「訳者の希望」中に「訳文中原語を残せるは今や格言として普く泰西に行はるゝものにして英語の智識を有する少年の記憶に存せしめんとて対訳せるものなれば其心して見給へかし。」とある。これは、原書に教訓が格言

で示された場合、その英語をそのまま記すとともに、対訳も載せて説明していることを指す。主な読者対象である旧制中学生の英語学習に資することを意図している。

複数の描き手による八二の挿絵がある。和風あり洋風あり、写実もあれば動物の擬人化もありと、画風に統一性を欠く。原書の挿絵を模写したようなのは見あたらない。

雨谷は本名幹一。『能楽大辞典』他芭蕉、曲亭馬琴に関する図書など著書多数。

#### 百島操訳『イソップ物語』

百島操訳編の「通俗文庫」シリーズの第七編。原書が何かは明示されていないが、Townsend 本から七〇話を選んで訳したものである。内外出版協会から明治四一年（一九〇八）一二月に刊行される。寓話本文の前に、自身による「序」、読後の感想を送ってほしい旨の読者への呼びかけ、「目次」がある。ただし明治四四年一〇月刊の第三版には読者への呼びかけがない。Townsend 本の諸版のうち一九二ページ本が底本と思われる、一四番目までは順もそのままに採用している。総ルビの常体の口語文。第四話「狼と鶴」、第一二話「兎と亀」、第三二話「牛と蛙」、第三八話「鼠と蛙と鷹」、第五一話「兎と蛙」、第五二話「驢馬と狼」には Townsend 本の挿絵を載せている。それ以外に挿絵はない。

百島操は号を冷泉という。トルストイ、グリム、アンデルセンなど多くの訳書がある。また「福音新報」にイ

ソップ寓話を三話訳して載せている<sup>注九</sup>。うち一話は、本書の第一話「獅子と鼠」と同じ話だが、訳文は異なる。

#### 四 『伊娑菩喻言』系

##### 『伊娑菩喻言』

イギリス人 Robert Thom（中国名羅伯珮）が L'Estrange の *Fables of Aesop* から八二話を中国語に訳し道光二〇年（一八四〇）に The Canton Press Office から刊行した『意拾喻言』の改訂版で、七三話を収める。『意拾喻言』と比べると、寓話のタイトル、本文中の文字に多少の異同が認められる。寓話本文の前に「叙」「小引」（イソップ及びイソップ寓話の簡単な説明）がある。咸豐三年（一八五三）頃刊と推定される上海施業院版、同治七年（一八六八）刊の香港英華書院版、光緒二九年（一九〇三）刊の香港文裕堂版などがある。穴戸璣が安政三年（一八五六）に写し、それを閲読した吉田松陰が更に岡部富太郎に写させていたことが知られている。また中牟田倉之助が文久二年（一八六五）に上海で購入している記録がある。『意拾喻言』は、幕末・明治初期に日本にもたらされた形跡がない。内田慶市編著『漢訳イソップ集』（ユニウス、二〇一四年二月）に影印と解説がある。

##### 阿部弘国訓点『漢訳伊蘇普譚』

『伊娑菩喻言』の原文に訓点、送り仮名を施して出版したもの。扉に「香港英華書院原刻」とあり、同治七年（一八六八）刊の英華書院版を原本とする。寓話の掲載

順も原本と同じ。ただし「叙」と「小引」を省き、新たに大槻盤溪の漢文の「序」と阿部の漢文の「伊蘇普小伝」、更には「目次」を加える。本文はほぼ原本どおりだが、イソップの漢字表記「伊娑菩」を「伊蘇普」に変えている。全七三話。和装本で、出版人は東京の青山清吉。明治九年（一八七六）一〇月刊。内田慶市編著『漢訳イソップ集』に影印と解説がある。

阿部には修身書、地理関係などの著書がある。

#### 前田儀作編『漢訳批評伊蘇普物語』

小野辰三郎訓点。「大清国大儒某反訳」とあるが、副題に「一名伊娑菩諭言」とあるとおり、『伊娑菩諭言』の原文に訓点を施したもの。原本の全七三話を載せる。

配列順は異なる。原本の中間部（第二一話から第二八話）の八話を初めに置き、前部（第二話から第二〇話）の一九話を次に配し、後半部（第三八話を除く、第二九話から第七三話）の四四話を最後に並べた体裁になっている。ただし第三八話を冒頭に、第一話を三八番目としている。また第二一話と第二二話の順が逆になっている。したがって二九番目以降は、三八番目を除いて『伊娑菩諭言』と配列番が一致する。具体的には今号の「タイトル・原拠・同定」編を参照していただきたい。

原文の難読あるいは難解の語句には左右の傍らに片仮名で註を加える。『漢訳伊蘇普譚』とは異なり、原本の「叙」「小引」も省かれていない。僅かながら原文を変えた箇所がある。例を挙げればギリシアの漢字表記「記

厘士国」を「希臘国」とするなど。一方書名を「伊蘇普物語」としながら、本文中のイソップの漢字表記は原本どおり「伊娑菩」とする。全七三話。東京の湊屋から明治三一年（一八九八）七月に刊行される。前田が発行者となっているので、湊屋は前田の創始にかかる出版社であろう。内田慶市編著『漢訳イソップ集』に影印と解説がある。

前田儀作（一八六四～一九四六）は号を林外と称する。東京専門学校を卒業後、詩人として活躍している。小野辰三郎については号を筑山という以外は一切不明。

#### 五 Charles Stickney: *Aesop's Fables* ※

Charles Stickney: *Aesop's Fables*

旧制中学校用の英語教科書として編まれたイソップ寓話集。二ページ余の *Life of Aesop* の後に全一二六話を収載する。中学校において広く使用され、これの翻訳書、学習参考書、雑誌掲載の註釈等が数多く出版されている。  
注一〇。

Stickney は Rev. の肩書きが付いているので、日本在住の聖職者なのであるが、詳細は不明である。以下のよう

にいくつかの出版社から刊行されている。

ヨシオカ 明治二一年

富山房 明治二五年

小川尚栄堂 明治三〇年？

金刺書店 明治三四年

岡崎屋書店 明治三五年

興文社 明治三五年

その普及振りを証する記述をいくつか引用しておく。

「此訳書は我国の学生間に最も多く行はるゝ英訳（Stickney 本）に拠りて正訳したるものなれば、」（佐藤潔訳『正訳伊蘇普物語』「緒言」）

「本書インソップ物語は牧師ステックニー氏の編纂にかゝる英文で現今我国の諸学校に英語教科書として盛に採用せられてゐるものです。」（吉田潔訳註『独学自修インソップ物語』）

Stickney がどのインソップ寓話集から編集したのか現在のところ調査が不完全であるが、Townsend 本がその一つであるのは間違いない。その根拠として第一二一話 THE BLIND MAN AND THE WHELP を引用しよう。

A Blind Man was accustomed to distinguish different animals by touching them with his hands.

The Whelp of a wolf was brought him, with the request that he would feel it, and tell what it was.

Being in doubt, he said, "I do not quite know whether it is the cub of a fox or the whelp of a wolf, but this I know fully well, that it would not be safe to admit him to the sheepfold."

Evil tendencies are shown in early life.

これに該当する Townsend 本の第二三四話（一九二ページ本での番号）はほぼ同文である。ただ下線部分がそれぞれ Townsend 本の表記形式に従って BLIND whelp of a Wolf Fox Wolf となっている。また波線部分は tell

が say となっていて、Being の前に He felt it, and が付いている。

これほど一致するのは稀だが、寓話本文全体ではなく一部が同文であるのならば、第一一五話 The two Pots を挙げることができる。これは次の一文から始まる。

A River carried down, in its stream, two Pots, one made of Earthenware, and the other of Brass.

Townsend 本もまた全く同一の文で始まる。正確にいうと、in its stream の前後のコンマが無く、小文字・大文字の使用が若干異なるが、Stickney 本が Townsend 本から冒頭の一文を採ったのは明かである。ただしこれ以降の行文は全く異なる。

以上に見るとおり Stickney 本の有力な種本の一つが Townsend 本なのである。ただし Stickney 本には Townsend 本にない寓話もあるので、複数の本に基づいていることも確かである。

栗野忠雄訳『伊蘇普物語直訳講義』

Stickney 本の学習書。英文はなく、一文ごとに「直訳」と「講義」（通常の訳）とを記す。漢字片仮名交じりで、「講義」は口語体。全一二六話。当然掲載順は原本どおり。東京の青野天章閣、明治三〇年（一八九七年）四月刊。

本文の一例として、第一話 THE WOLF AND THE LAMB の冒頭の一文の「直訳」と「講義」とを示す。英文は Stickney 本から引用する。

(原文) One day a Wolf and a Lamb happened to come at the same time to drink from a brook that ran down the side of the mountain.

(直訳) 一日狼ト而シテ羊仔ガ山ノ辺ヲ流レ下リシ所ノ小川カラ飲ム可ク同時ニ来ルベク起リシ

(講義) 狼ト羊仔ガ或日山ノ辺リヲ流レル小川ノ水ヲ飲ミニ来テ偶然出逢フタ

「直訳」は当時英語教育に採用された方法で、ここに見るように to 不定詞をいちいち「ベク」と訳し、関係代名詞 that を「所ノ」とするなど極端な逐語訳で、結果として不自然な日本語となるのも厭わない。

栗野は明治二十年代以降英語学習書を多く著している。同名の者が明治十年代に数学書を出版しているが、同一人物かは不明。

大正期以降になっても Stickney 本の需要は絶えなかったようで、次のような学習書が出版されている。この時期になるとさすがに直訳は消える。

石原益治著『伊蘇普物語講義』(東京・建文館、大阪・盛文館、大正三年一月)

市川又彦訳註『イソップ物語講義』(東京・早稲田図書出版協会、大正七年一〇月)

元木貞雄講述『伊蘇普物語直訳講義』

Stickney 本の学習書。栗野本同様に、英文はなく、一文ごとに「直訳」と「講義」とを記す。どちらも漢字片仮名交じりの文語体。全一二六話。東京の小川尚栄堂、

明治三二年(一八九九)八月刊。元木は英語の学習書、少年向け図書などを多く著している。

関貢米編：Stickney's *Aesop's Fables*

Stickney 本も出している東京の小川尚栄堂から明治三四年(一九〇一)一〇月に刊行される。Stickney 本から九四話を選び、原本の掲載順に従った英語本。Stickney 本同様に中学校の英語教科書である。当時の中学校教科書は初版を文部省に提出し検定を受けた後、訂正を加えて再版を発行する。本書は「明治三十五年二月二十七日文部省検定済」とあるので、同年四月発行の再版以降が一般には販売された。大正二年(一九一三)に第二版が出ており、広く普及したものと思われるが、Cini に拠る限りは島根大学附属図書館蔵本しか確認できない。Life of Aesop はなく、寓話本文のみ。寓話末尾の教訓を示す文をイタリック体にして寓話部分と区別する工夫を施している以外は、Stickney 本と変わりない。

関には関貢米また関露香の名で、英語関係などの著作がある。

鐘美堂編輯部編：Aesop's *Fables with Illustrations*

英語教科書。Stickney 本から七三話を選び、原本の順に従って掲載したもの。英文のみ。二八話には挿絵も添える。大阪、東京の鐘美堂書店、明治三六年(一九〇三)一月刊。

挿絵は一部 Townsend の二二四ページ本を利用したと

思われる。詳しくは【補論二】で述べる。

### 佐藤潔訳『正訳伊蘇普物語』

東京の小川尚栄堂、明治四〇年（一九〇七）一二月刊。  
「此訳書は我國の学生間に最も多く行はるゝ英訳に拠りて正訳したるものなれば、」（「緒言」）とあつて、その英訳本の名は明示されていないが、Stickney 本の全一二六話を掲載順もそのままに翻訳したものである。ただし、原書にあつた Life of Esop は省略する。最初に佐藤による「緒言」、続いて本文を載せる。「緒言」は文語文だが、本文は総ルビの常体の口語文。Townsend 本から写し取った二九の挿絵がある。各寓話には末尾に訳者による『説明』という総ルビの敬体の口語文による教訓が付いている。

二九の挿絵はすべて Townsend 本の挿絵の模写である。Townsend 本の三種の版のいずれにもある絵ばかりであり、一一四図と最も絵数の多い T<sub>2</sub>（二二四ページ）だけにある図を含んでいないので、佐藤が利用したのは T<sub>2</sub> ではないだろう。なお、第九七話「アラビヤ人と駱駝<sup>らくだ</sup>」の挿絵は Townsend 本の THE CAMEL AND THE ARAB から採っているが、両者は内容の全く異なる寓話である。たまたま登場人物・動物が同じであることから流用したものである。

佐藤の事跡は不明。

### 吉田潔訳註『独学自修イソップ物語』

東京の金刺芳流堂、明治四三年（一九一〇）三月刊。  
Stickney 本の学習参考書。原本の全一二六話を順もそのままに載せる。前書きに「原文の下に逐語訳を附し更に平易な訳文を加へ猶註解を施して難文難句は勿論発音等に至るまで周到なる注意と叮嚀説明を与へてある」とあるとおりの構成をもつ全三二二ページの詳細な注釈書である。訳文は常体の口語文。

前書きの次の記述は Stickney 本の普及ぶりを証言している。「本書イソップ物語は牧師ステックニー氏の編集にかゝる英文で現今我國の諸学校に英語教科書として盛に採用せられてゐるものです。」

吉田の著作には英書からの翻訳書、英語の教科書・学習書がいくつもある。

### 西片寒川訳『教訓叢話イソップ物語』

東京、大阪の井上一書堂、明治四三年（一九一〇）四月刊。「はしがき」「目次」「イソップ略伝」に寓話本文が続く。全一七〇話で、第一六六話までは番号が付されているが、末尾の四話はイソップとは無関係で、「お伽花四」としてある。「お伽話」と四話であることをかけているのであろう。「イソップ略伝」は Stickney 本から採って訳す。第九三話までは、Stickney 本から九三話を選び、原本の掲載順に従っている。この九三話は関貢米の前記英語本（以下、関本）の九四話とほとんど一致する。関本にある Stickney 本の第六二・七三話を西片本は欠き、一方関本にない Stickney 本の第六六話を西片本は

採録している点が異なるだけである。西片は Stickney 本とともに、その抜萃本である関本も利用したかに思われる。第九四話以降が何に拠ったかは未調査。「はしがき」「イソップ略伝」は文語体だが、本文は敬体の口語文。「はしがき」に「現時各中、小学校教科書にしてイソップ物語を引用せざる者は殆んど稀なり」とあり、当時の初等教育におけるイソップ寓話の利用がうかがえる。

西片については不明。

#### 西垣堯則訳『伊蘇普物語二百話』

大阪の立川文明堂、明治四四年（一九一一年）一月刊。冒頭に Stickney のイソップ伝の訳を載せる。続く本文はタイトルどおり全二百話。話の後に「説明」「格言」を付すのが、本書の工夫である。第一二六話までは Stickney 本とタイトルも順番も一致する。このように Stickney 本の翻訳に、他のイソップ寓話集から採って第一二七話以降を付加したかのように見えるが、詳細に調べるとそう単純ではない。その調査結果は【補論三】に述べる。総ルビの敬体の口語文。

西垣には英語学習や倫理学関係の著書がある。

#### 菅野徳助・奈倉次郎訳註『伊蘇普物語 一、二』

東京の三省堂刊。旧制中学校生に向けて、独習の助けとして発刊された青年英文学叢書の第二十一篇と第二十四篇。

『伊蘇普物語 一』（第二十一篇）は明治四四年（一九一一年）八月刊。「緒言」「目次」を付す。英文イソップの中でも「最も簡明にしてイデオマティック」（「緒言」）な Stickney 本の第四三話までの原文のパラグラフごとに訳・註を付ける。訳文は常体の口語文。

『伊蘇普物語 二』（第二十四篇）は大正二年（一九一二年）一月刊。体裁は第一巻に同じ。Stickney 本の第四四話から第八六話までの四三話を載せる。寓話番号は『伊蘇普物語 一』から続いている。訳文は常体の口語文。「猶物語の残部有り第三巻を以て完結すべき計画なり」（「緒言」）とあるが、第三巻の所在は確認できない。菅野徳助（一八七〇～一九一五）は早稲田大学で教壇に立った英語教育者。奈倉次郎（一八七二～一九四七）は当時山口高商教授の英語教育者。青年英文学叢書の多くは菅野、奈倉の共訳註。

#### 六 その他

渡辺松茂『家庭教育小学修身はなし』

渡辺松茂『家庭教育幼年修身はなし』

鈴木青溪『新訳伊蘇普物語』

『家庭教育小学修身はなし』

「家庭教育」の名を冠したシリーズ物の一冊。当時多く出版された小学生向けの修身書の一つで、書名に「イソップ」の名はないが、事実上イソップ寓話集である。全一二九話。四話については「ローヤル第三」「ナショナル第二（第三）」といったように、イギリス、アメリカ

力の教科書を原拠としたことが示されている。他には原拠が明示されていないが、複数の英書に基づくと思われる。その一つが『Townsend 本であることは【補論四】で後述する。

本文の前に、高崎正風の「天長節唱歌」、矢田部良吉の「勸学の詩」という、共に七五調の文語体の韻文、及び「目録」がある。本文は敬体の口語文。四八図の挿絵がある。挿絵については【補論四】参照。大阪の積善館により、明治二十四年（一八九一）二月三日刊行。

渡辺松茂は大阪の人で、児童・生徒向けの英書の翻訳書や学習書を多く積善館から出している。

『家庭教育幼年脩身はなし』

本書（以下『幼年』と略記）も「家庭教育」シリーズの一冊。『家庭教育小学脩身はなし』（以下『小学』と略記）の続篇と呼ぶべきもので、全一五二話は、第三三話「好事な小児」を除いて、イソップ寓話とされる話ばかりである。『小学』と寓話に重複はない。これも複数の英書に基づくと思われる、その一つは『Townsend 本である。

本文の前に、井上哲治郎訳の「玉の緒の歌」、小川健次郎の「朝顔の花に寄せて学童を奨励す」、山仙士（外山正一）の「ロングフェロー氏の歌」（アメリカの詩人 Henry Wadsworth Longfellow の A Psalm of Life の訳）という共に七五調の韻文、及び「目録」がある。本文は敬体の口語文。四七図の挿絵がある。挿絵については【補論四】参照。

大阪の積善館により、『小学』の二日後の明治二十四年（一八九一）二月五日刊行。事実上同時出版である。

『新訳伊蘇普物語』

『小学』『幼年』と同じ大阪の積善館により、半年後の明治二十五年（一八九二）五月に刊行される。表紙に「青溪散史訳」、扉に「鈴木青溪訳（第一一版では「鈴木青溪編輯」）、奥書に「訳述者兼発行者（第一一版では「編輯兼発行者」）鈴木常松」とあるので、「青溪（散史）」は鈴木常松の号と知られる。また「発行者」とあり、かつ鈴木と積善館の住所は同一なので、鈴木は同館の代表者である。ただし半年前の『小学』『幼年』の奥書では積善館の代表者は「香川一秀」である。

編訳者名も書名も全く異なるが、『小学』『幼年』の改題本である。『幼年』を上とし、『小学』を下として合冊に仕立て直す。書名・編訳者名の変更の必要に応じ、適宜活字を植え換えているが、本文は全く同一である（【補論四】の図参照）。渡辺と鈴木が同一人物でない限りは、編訳者名はどちらかが虚偽となる。両者の間に何らかのトラブルが生じたのだろうか。

よく読まれたようで、版を重ねている。初版に従うと、『小学』『幼年』にあった「天長節唱歌」「玉の緒の歌」等の韻文は一切省かれている。上下を合わせた「目録」に本文が続く。挿絵も『幼年』の四七図、『小学』の四八図を省かず載せる。

初版以外では明治三十六年六月刊行の第一一版を見ているが、両者を比較するといくつか異なる点がある。詳し

くは【補論四】で述べる。

この『新訳伊蘇普物語』巻末の広告には『小学』『幼年』も挙げられている。そうすると、積善館は、出版倫理上大いに問題があるが、『小学』『幼年』とその改題本を同時に販売しようである。当然広告を見た者は、別内容の書と思うだろう。

鈴木には著書もあるが、主に出版人として日本の古典や漢籍に関わる図書を多く刊行している。

### 中川柳涯編『ポケット伊蘇普物語』

東京の日吉堂、明治四三年（一九一〇）一〇月刊。本文の前に自序と口絵二図（「猫と鳥」「猿と海豚」と「人と獅子」「偽孔雀」）がある。総ルビに近い敬体の口語文。全一五〇話。積善館の『新訳伊蘇普物語』の影響が大きい。詳しくは【補論五】で述べる。

中川は明治四二年頃から「明治少年お伽噺」というシリーズを東京の島鮮堂で出しており、このうちの四編はイソップ寓話の改作である。同じく島鮮堂の明治四二年頃からの「絵入日本お伽噺」シリーズでも幾編かイソップ寓話の改作を出している注一。これらはいずれも改作なので、『ポケット伊蘇普物語』と本文の類似は見られない。

中川には歴史読物や実用的な文章作法の著作がある。

### 馬場直美編『ポケット新訳イソップ物語』

東京の岡村盛花堂、明治四三年（一九一〇）一〇月刊。

ほぼ総ルビの敬体の口語文。本文編の前に、文芸評論家高須梅溪（一八八〇～一九四八）の序に続き、「驢馬と狐」「狐と鳥」「牧童と狼」「獅子と鼠」の四話につき、七・五の句の繰り返し六句から成る口語韻文と中村菱花による絵を載せる。絵は Townsend 本を参考にしたかもしれないが、概ねオリジナルと見てよさそうである。口語韻文の一例として「驢馬と狐」のを挙げておく。

半間な驢馬がりました／或時獅子の生皮を／冠つて仲間に見せますと／諸獣は恐れて逃げました／驢馬は図に乗り啐えたため／忽ち素性が知れました

本文編は二五七話ある。「新訳」と称してはいるが、特定の英書の翻訳ではない。積善館の『新訳伊蘇普物語』の影響が見られる。詳しくは【補論五】で述べる。

馬場直美は岡村書店から『お伽百題』というイソップ寓話を含む子ども向けの物語集を出しているが、これと本文の類似は見られない注二。これの挿絵も中村菱花が担当しているが、本書の絵とは一致しない。

### C. M. Cady: *The Series-Form of Aesop's Fables*

Part I Part II の二冊がある。京都の The Orphan Industrial Press 刊。共に明治三四年（一九〇一）の発行で、Part II は七月だが、Part I は発行月不明。同 Press の刊行物を国会図書館サーチで検索すると、一五種中一四種が Cady の著編書である。また Part II の奥書には「著作兼発行印刷者」として「シイ、エム、ケイデ」とあるのど、Cady の創設した出版社であろう。旧制中学校の

英語教科書として出版されたと思われる。Part I の扉には書名に続いて WITH/ Conversational Phrases/ ARRANGED ACCORDING TO/ "The Psychological Method/ OF/ Teaching and Studying Languages" とある (Part II は ARRANGED 以下を欠く)。四ページの INTRODUCTION が続く。各課二ページに収まり、奇数ページにインソップ寓話、次の偶数ページに A CONVERSATION と称して teacher と pupil の会話を載せる。会話の内容は寓話とは関係しない。各センテンスは短く、平易な英文である。Part I は二五課、Part II は二〇課あり、計五五のインソップ寓話を含む。

著者 C.M.Cady の C.M. の具体名は不明。扉に PROFESSOR IN THE THIRD KOTO GAKKO AND INSTRUCTOR IN ENGLISH IN THE FIRST CHU GAKKO, KYOTO とあり旧制三高、京都一中で教壇に立っていたことが知られる。英語の教科書、学習書をいくつか著している。

西村醉夢編『少年世界文学第五編インソップのはなし』

坪内逍遙関、東城鉦太郎画。富山房、明治三五年（一九〇二）一二月刊。「少年世界文学」は、坪内逍遙が校閲者となって、古今東西の物語を収めたシリーズ。執筆者は「青年諸名家」つまり若手の書き手が選ばれている。その一編としてインソップ寓話を選ばれた。西村醉夢（一八七九〜一九四三）も当時数え二四歳であった。

全二四話。文体は敬体の口語文。総ルビ。一五話に挿

絵を付す。絵は動物に和服を着せるなど日本風。西村は後に早稲田大学教授となる、歴史学、文化人類学の研究者。東城鉦太郎（一八六五〜一九二九）は後に日露戦争画で名をなす画家。

C. A. Parry: *Fables from Aesop in Short Sentences*

旧制中学校の教科書として編まれた。一ページの INTRODUCTION の後にインソップ寓話を七一話収める。as material for oral work とあり、読解ではなく、暗記して発話できることを目指している。本文はタイトルどおり平易な短いセンテンスからなり、暗記しやすい。東京の興文社、明治三十七年（一九〇四）七月刊。

INTRODUCTION で自分のクラスで実践したことを述べ、また末尾に Kochi, Japan とあるのび、C. A. Parry は高知の中学校の教員であったと思われる。奥書に「チャールズ、エ、パリ」とあるので、C. は Charles であろう。同名の者が明治四三年に横浜の出版社から *Military Japan* というフランス語を英訳した本を出しているが、同一人物かは不明である。

上田万年解説『新訳伊蘇普物語』

解説の上田万年（一八六七〜一九三七）は当時東京帝大教授で、既に学界の権威者であった。扉には「東京大阪 鐘美堂発行」とあるが、奥書には発行所として鐘美堂と共に東京の玄黄社の名も載る。明治四〇年（一九〇七）一月刊。広く読まれたようで、明治四四年に第

一版が刊行されている。

別々にページ付けされた上篇と下篇から成り、両篇が合冊されている。「例言」「イソップ小伝」「目次」「訓言索引」に続いて上篇八〇話、下篇八〇話のイソップ寓話、「附録 ぱんちやたんとら」九話、以上から構成されている。上田による「例言」は、「フエーブル」の語源から説き起こす学術的色彩の濃い文章である。「第十三世紀初めの仏蘭西の学者、バシエ、ド、メセリアの記録」に基づくという「イソップ小伝」に筆者名はないが、これも上田であろう。「訓言索引」とは訓言からその教訓にふさわしい寓話を求めることができる「いろは順」の索引である。最初の例を挙げれば「〇入るわ易く出づるわ難し。……（上篇一三二頁）二匹の蛙」といった具合である。各寓話本文のあとに「訓言」「解説」が付く。「訓言」は一文だが、「解説」は概して長い。寓話本文より長文の場合もある。附録として古代インドの「パンチャタントラ」を載せたのは、「皆予が旧稿にして、甚だ粗末の物なれども、フエーブル研究者の興味を惹起せんが為に」（「例言」）とある。

梶田半古（一八七〇～一九一七）による挿絵は、附録も含めすべての寓話に付く。イソップ寓話集で、全話に挿絵を付けたのは本書が最初である。人物が登場する場合は多く和風にする。梶田は当時挿絵画家として人気があった。

「例言」「イソップ小伝」は大人向けなのであろう、文語体の文章である。本文は敬体の口語文で総ルビ。本

書の特徴の一つは、上田の主張する発音式仮名遣いで表記されている点である。「例言」に「未来の普通教育に、かゝる発音的仮名遣を基礎とすべきは、予の確信する所なればなり。」とその信条を述べている。しかし、森鷗外らの反対に遭って、この新仮名遣いは教育政策としては敗北する。

先行するイソップ寓話集に収載されていない寓話を多く載せているのも本書の特徴である。筆者の調べた限りでは、寓話番号をアラビア数字で示すと、2・9・12・23・28・34・42・43・53・57・59・63・67・75・83・93・99・103・120・138・149・150・154・159の二四話が本書によって初めて紹介された話である。第一三八話は清で発行された『意拾喻言』にはあるが、この系統で日本に伝わった『伊娑菩喻言』には採られていない。原拠とした文献については何も記されていないが、花間隆・難波博子に依れば「Croxall 196話、L'Estrange 1—201で網羅される」注三とのことである。

本書が「上田著」とも「上田訳」ともせず、「上田解説」とするのは気にかかる。各寓話に付された「解説」は確かに上田らしく、ときにヨーロッパの歴史や文化の知識がちりばめられている。では寓話本文は誰の手によるのか。「本書の出版に就ては、菅野緑蔭・徳田秋声両君の熱心懇篤なる補助を蒙れり。」（「例言」）とあり、上田・菅野・徳田の三人の手を経て成文となったかと思像される。徳田秋声（一八七二～一九四三）は小説家として名が始めていた頃である。英語に通じているので、

下訳などを引き受けたか。菅野については不明。

### 中村徳助『新訳解説伊蘇普物語』

全一二四話を収めるが、イソップ寓話以外にも二八話ある。「巻末に、吾国名士の逸話を附したり」（「はしがき」）とあり、日本の歴史逸話もある。ただし巻末とは限らない。ヨーロッパの歴史逸話も載せる。全体に編集が未整理である印象を受ける。「本書は急遽の出版につき校訂に違あらず誤植少からざるべし」（「はしがき」）というの謙辞とばかりは受け取れない。一例を挙げておく。

「第八十四 美は久しからず」は *Aesopica* 二二九番の「燕とハシボソガラス」の話である。本文は「一羽の鳥と一羽の雀が……」と始まるが、以降は「雀」が「燕」に変わっている。これは当初 swallow を sparrow の意味と取り違え、後でその誤訳に気づきつつ、最初の語例を訂正し忘れたものと推測される。敬体の口語文。東京の精華堂書店、明治四二年（一九〇九）二月刊。

「新訳」とあるが、内容を適宜変えており、翻案ないしは改作と呼ぶのがふさわしい。その例を二つほど挙げておく。「第十三 猫に鰐節」は *Aesopica* 一三番「狐と葡萄」（ブドウを得られなかった狐があれは酸っぱいブドウだと負け惜しみをいう話）に基づくが、表題どおり猫とカツオブシに変えている。「第一百六 馬鹿々しき高慢」は *Aesopica* 三三番「法螺吹き」（ロドス島で大ジヤンプをしたと法螺を吹く話）に基づくが、舞台を「米国」にしている。

中村徳助は、「アラビヤンナイト」やサミュエル・スマイルズ「自助論」（小山内薫との共訳）の翻訳がある。本書刊行の一年後の明治四三年には『世界新お伽』（盛林堂刊）という少年向け読み物を出しているが、これには三四話のイソップ寓話が含まれている。両者に共通する寓話本文を比較すると、『世界新お伽』は本書の本文を常体の口語文に変えただけであることがわかる。

### 英語研究社『イソップの話 第一〜三』

#### 『イソップの話』（第二）

『英語研究』記者編著、英語研究社、明治四三年（一九一〇）六月刊。英語雑誌『英語研究』の同人が刊行した「初等英語叢書」シリーズの第十二編。英語と和訳が対応できるように、見開き左ページに英文、右ページにその訳文を載せる。各ページに脚注を付ける。更に巻末に詳細な「註釈」を付す。英文は「現時教科書として用ゐられて居る各種の読本中から萃いて置いた」（緒言）という。全二〇話。訳文は常体の口語文。次に示すように「第二」「第三」が刊行されたので、これを「第一」としておく。

#### 『第二イソップの話』

鈴木正士訳、杉山孫之助註、『英語研究』記者校訂、英語研究社、明治四四年（一九一一）六月刊。「初等英語叢書」の第十八編。『イソップの話』（第一）が大好評を得たので続刊を刊行したという。本文の体裁は「第一」と同じ。訳文は敬体の口語文に変わっている。「註

「釈」が詳細な Part I (訳文では「上の巻」と、「註釈」が「普通世間並の詳しさ」の Part II (「下の巻」とに分かれる。前者は一五話、後者は二〇話の計三五話を収める。鈴木、杉山は、「初等英語叢書」シリーズのいくつかを担当している。

### 『第三イソップの話』

鈴木正士訳、荒井克成註、『英語研究』記者校訂。本文の体裁は「第一」と同じ。全四四話。訳文は敬体の口語文。大正二年(一九一三)二月刊。荒井には英語関係の著訳書が二、三ある。

### 普光社：『英文イソップ物語』 *Fables from Aesop and Others*

表紙に「倫敦 マクミラン社印刷／東京 普光社発行」とある。これに従えば、英国ロンドンの Macmillan 社発行のイソップ寓話集を英文のまま日本で売り出したことになる。扉に *Macmillan's Supplementary Readers/ INTERMEDIATE/ Fables from Aesop And Others* とある。Macmillan 社からはいくつかイソップ寓話集が出ていたようだが、これは初版一九〇七年刊の幼少向けのシリーズの一冊である。その一九一〇年の版に拠って日本で発行したらしい。一ページの Note、続いてイソップ寓話全八〇話を載せた後に他の物語を三話付けている。これまで日本では知られていない寓話をいくつか含み、第一二・四五・六一・六三・六六・七〇・八〇話は先行のイソップ寓話集には見られない話である。普光社はキリス

ト教関係の本を多く出版している。

### 稲葉翠浪編『新式イソップものがたり』

全一二九の寓話がある。前後編の二部に分かれ、前編は「自分に関するお話」として六七話を「本文を守るべきことのお話」「おのれ自身をしるべきことのお話」など教訓の内容に従い分類して載せる。後編は「対手に関するお話」として六二話を「よく対手を見るべきことのお話」「友は選んで交るべきことのお話」など教訓の内容に従い分類して載せる。翻訳ではなく、上田万年の『新訳伊蘇普物語』を含む先行のいくつかのイソップ寓話集に基づいて、登場動物を変えたりなど原話を大きく改めている。参考にした先行書の一つが上田本であることは、これにのみ載る寓話が採られていることから確かである。またイソップに基づかない、あるいは創作と思われる寓話を相当数含む。目次の後にクジャクの絵があり「春風に尾をひろげたる孔雀かな」の句を付す。これは前編の第1話「孔雀の不平」(*Aesopica* の五〇九番「声の不満をユノに訴えるクジャク」)を描いたものである。他には挿絵はない。稲葉隣作発行、明治四四年(一九一四)四月刊。発売所として東京の慶文堂の名が挙がっているが、奥書に「編輯兼発行者」として「稲葉隣作」とあり、自費出版に近いと推定される。亡くなった友人たちの写真を載せるなど私的な出版物の趣を免れない。

稲葉翠浪(隣作)の事跡は不明だが、当時の千葉県師範学校校長里村勝次郎に序文を依頼しており、同校の卒業

生と思われる。

### 巖谷小波『イソップお伽噺』

東京の三立社、明治四四年（一九一）八月刊。全一六〇話。「緒言」、イソップ肖像画と巖谷の写真、「イソップ伝」、色付きの二図、「目次」、それらに本文が続く。タイトルは、例えば「正直の頭に神宿る（鉄の斧と金の斧）」のように、教訓を主とし、内容を従とする。すべて本文は「諸君！」と始まり、「訓戒を説き、後に談柄を述べる」（「緒言」）形式を採る。奥書には巖谷は「訳述者」とあるが、特定のイソップ寓話集を翻訳したとは思われない。「決して原文に拘泥せず、所々に潤色を加へ、又順序も前後させ」（「緒言」）と言うとおり、依拠した文献からの改作に近いと推定される。その依拠した「原文」については何も明示されていないが、多くの話が上田万年『新訳伊蘇普物語』に基づいていることは疑いない。それについては【補論六】で述べる。「緒論」は常体の口語文、「イソップ伝」、寓話本文は敬体の口語文。すべて総ルビに近い。

およそ半分の七八話には挿絵がある。先行のイソップ寓話集の絵柄の影響のない漫画風のタッチで、当時の読者には新鮮に感じ取られたであろう。

### 宝文館編輯所：New Selections from Aesop's Fables

東京・大阪の宝文館、明治四四年（一九一）一〇月刊。前書きの類が一切ないので、原拠、出版の事情など

は不明。英文で五〇話を収める。教科書であつたと思われ、第一話は平易で短いセンテンスから成っている一方、第五〇話は重文や複文が多用されるなど、徐々にレベルを上げる構成になっている。脚注で注意すべき語の発音を示している。

### 【補論一】『寓意勸懲伊蘇普物語』と『通俗伊蘇普物語』

田中達三郎の『寓意勸懲伊蘇普物語』と渡部温の『通俗伊蘇普物語』とは原本たる英書が異なるが、前者の訳文は後者から大きな影響を受けていることを指摘したい。田中の戯作めいた話法には、校正者として名が挙がっている戯作者若菜胡蝶園の力が与っているのである。しかしそれだけではなく、渡部の自在な訳文を取り込んだ結果でもある。以下いくつかの具体例を挙げて両者を比較してみよう。

①『寓意勸懲』の「第廿八 山の震動する話」は『通俗』の「第六 鼠の仕業する話」と同じ寓話である。

以下、田中の訳文、その原本である Townsend 本の英文、渡部の訳文、その原本である James 本の英文を順に引用する。

#### （田中訳）

むかし或山烈く震動して。不思議な呻鳴が聞こえ、  
ふ評判が専ら世間に高なり。四方八方より見物人多く集り来て。なに事ならんと。怕々窺ひたりしに。  
須臾ありて内から一疋の小鼠孤然出てチウ〜

（Townsend 本）

A MOUNTAIN was once greatly agitated. Loud groans and noises were heard; and crowds of people came from all parts to see what was the matter. While they were assembled in anxious expectation of some terrible calamity, out came a Mouse.

(渡部訳)

むかし或山烈く震動して。内より何か出現するといふ評判が高くなり。遠近より見物人多く集り来て。是は定てめづらしきものゝ出るなるべし。何ならんと人々待かねたりしに。須臾ありて大に地響すると、一疋の小鼠が孤然踊出して。チウ

(James 本)

In days of yore, a mighty rumbling was heard in a Mountain. It was said to be in labour, and multitudes flocked together, from far and near, to see what it would produce. After long expectation and many wise conjectures from the bystanders — out popped a Mouse!

田中と渡部の訳文がほぼ一致する表現の箇所に傍線を引いた。基づいた英文が異なるにも拘わらず、両者は一読してそっくりである。渡部の最も工夫したのは最後の「一疋の小鼠が孤然踊出して。チウ」であらう。James 本には鼠の鳴き声など書かれていない。「チウ」でしめくくつたのは恰も落語のオチのようで、苦心の訳といえよう。Townsend 本にも擬音語は出てこない。それを田中は「一疋の小鼠孤然出てチウ〜」と渡部訳をほぼそのまま使っている。

② もう一つ寓話を比較する。『寓意勸懲』の「第二百十六 犬と鶏と狐の話」と『通俗』の「第二十五 犬と鶏と狐の話」である。同様に二つの訳文とその原英文を引用する。

(田中訳)

犬と鶏と懇意になり、ともに旅行に出かけたが、日の暮ければこの並木で一泊いたさんと。鶏は樹の梢に栖り。犬は幹凹の内に臥たりける。さて昧旦になると。鶏ははやく起き。例の朝誦経を始め。東天光と唱ひ出すと。狐かこれを聞つけ。好朝餐ぞとかけ来り。梢の下から鶏に向ひ。狐「鳥の中では足下位一番役にお立ちなさるものはあるまい。殊にお声も亦妙じや。マア茲へお下りなさい。御一処に朝の食事をしませうといへば、鶏は狐の礼讓正敷いのに気がつき、こいつアうっかりぐゑねへ奴だと思ひ鶏「難有御座ります、デハその幹凹の中に私の担夫が睡てゐますから起して下さりませ」といふ故。狐心得て幹凹を瞰下と中から犬が躍上つて狐を喰殺しける

(Townsend 本)

A Dog and a Cock, being great friends, agreed to travel together. At nightfall they took shelter in a thick wood. The Cock, flying up, perched himself on the branches of a tree, while the Dog found a bed beneath in the hollow trunk. When the morning dawned, the Cock, as usual, crowed very loudly several times. A Fox hearing the sound, and wishing to make a breakfast on him, came and stood under the branches, saying

how earnestly he desired to make the acquaintance of the owner of so magnificent a voice. The Cock, suspecting his civilities, said: "Sir, I wish you would do me the favour to go round to the hollow trunk below me, and wake up my porter, that he may open the door, and let you in." On the Fox approaching the tree, the Dog sprang out and caught him, and tore him in pieces.

(渡部訳)

犬と鶏と懇意になり。ともに某処へ出かけたりに。帰路並木にかゝりける時。日の暮ければ。さうば此処にて一泊いたさんと。鶏は樹の枝へ栖り。犬は下の叢に臥けり。さて昧旦になると。鶏ははやく起き。例の通り朝誦経を始め、東天紅と唱ひ出すと。近処の狐が忽ち聞つけ。好餌食ぞとかけ来り。樹の上にとまり居る鶏に向ひ。「イヤ汝は可愛い好鶏じゃ。なんでも羽虫の中では一番役に御立なさる。殊に御声も亦妙じや。マア茲へ御下りなさい。御一処に朝の御勤をいたしませう」と云ば。鶏はその意を覚り。「それは難有御坐ります。彼所に同行の鐘打坊が居ますから。ちよつと呼で下さりませ。誦経に鐘のないのは。どうも調子が悪いもので御坐ります」といふ故。狐が「それじやア呼で参りませう」と出かけると。調度犬が走で来て。忽ち是を喰殺ける (James 本)

A Dog and a Cock having struck up an acquaintance, went out on their travels together. Nightfall found them in a forest; so the Cock, flying up on a tree, perched among the branches,

while the Dog dozed below at the foot. As the night passed away and the day dawned, the Cock, according to his custom, set up a shrill crowing. A Fox hearing him, and thinking to make a meal of him, came and stood under the tree, and thus addressed him:—"Thou art a good little bird, and most useful to thy fellow-creatures. Come down, then, that we may sing our matins and rejoice together." The Cock replied, "Go, my good friend, to the foot of the tree, and call the sacristan to toll the bell." But as the Fox went to call him, the Dog jumped out in a moment, and seized the Fox and made an end of him.

表現がほぼ一致する箇所は傍線を施した。前半の部分が特に類似する。朝の鶏鳴を「朝誦経」に喩え、「東天紅」と擬音語を出したところに渡部訳に特徴的な奔放さが現れている。無論 James 本に「朝誦経」に当たる語句があるはずもない。それは Townsend 本も同様だが、田中訳はここでも渡部訳をそのまま採っている。

田中訳は渡部訳を取り込み過ぎた故か、Townsend の原文を無視しているかのように見える箇所が散見される。二、三の例をあげると agreed to travel together の agree は訳文には活かされていないし、several times は訳に全く反映されていない。「鳥の中では足下位一番役にお立ちなさるものはあるまい。」に当たる原文は Townsend 本にはない。これは、James 本にある most useful to thy fellow-creatures の渡部訳「羽虫の中では一番役に御立なる」を借用したものである。

また表記の点でいうと、両訳に「味旦」<sup>あじかん</sup>「朝誦経」<sup>あさかんきん</sup>が見られる。古辞書類の範囲では「明け方」を「味旦」とする表記は見当たらない。「看経」を「誦経」と書いた例も他には知らない。こういった一般的なではない表記の一致も田中訳が渡部訳を引き写している証といえよう。

①での「孤然」<sup>ヒヨツクリ</sup>もここに加えることができる。

③ ①②は寓話全文の類似であったが、語句のレベルで的一致をいくつか例示しておく。

③-1 田中は第十九「牧者<sup>かひて</sup>と失牛<sup>うせうし</sup>の話」で誓いの言葉として「南無大明神」を用いている。

(田中訳)

「南無大明神」<sup>だいいめうじん</sup> 牛賊<sup>どろぼう</sup>をお尋被下<sup>たづね</sup>ば子羊<sup>こひつじ</sup>一匹<sup>いちひき</sup>献納<sup>けんな</sup>せんと申上<sup>まひて</sup>ましたが、……」

(Townsend 本)

"Just now I vowed to offer a lamb to the Guardian Deities of the forest if I could only find out who had robbed me;

これも渡部が第六十四「牧人<sup>うしかひ</sup>と家牛<sup>かひうし</sup>の話」で使っている。

(渡部訳)

「南無大明神南無大明神。此災難<sup>のがれ</sup>を逃<sup>のがれ</sup>させ給へ。」

(James 本)

And the unhappy man vows the Bull into the bargain, if he may only escape from the thief's clutches.

原英文はどちらも vow とするだけで、誓いの言葉は具体的には出てこない。

③-2 田中は登場動物を「狐公」<sup>こんさん</sup>(第一七九話)、

「鳩公」<sup>はとつばさん</sup>(第二五九話)、「鴉公」<sup>くろさん</sup>(第二六八話・第二八六話)といった具合に擬人化して呼びかける工夫をしている。これは読者を話に引き込むのに効果的であろう。しかしこれも渡部が既に試みた方法の模倣なのだ。渡部の使用例を挙げておく。「狐公」<sup>こんさん</sup>(『通俗』第二話)。

③-3 『寓意勸懲』には「造物者<sup>てんどうさ</sup>賦与<sup>さくよ</sup>之分際」<sup>てんどうさまがさつよつしやつたぶんさい</sup>(第二〇一話)という、特異なルビが付されている箇所がある。ほぼ同文のルビは『通俗』に次の形で登場している。

「造物者<sup>てんどうさ</sup>賦与<sup>さくよ</sup>之分際」<sup>てんどうさまがさつよつしやつたぶんさい</sup>(第四話)、「造物者<sup>てんどうさ</sup>賦与<sup>さくよ</sup>た形状」<sup>なかたち</sup>(第一一七話)。

#### 【補論二】Aesop's Fables with Illustrations の挿絵

鐘美堂編輯部編 Aesop's Fables with Illustrations にはタイトルどおり挿絵が添えられている。本文は Stickney 本だが、同本には挿絵はない。従って本書の挿絵はオリジナルか、別の本から採用したかである。その出所につき、簡単な調査をしたので、その結果を記す。

本書の二八話にある挿絵を James 本のそれと比較したところ、類似するものはなかったが、Townsend 本と比較すると以下のような結果を得た。

Routledge 社刊の Townsend 本にはいくつかの版があり、いずれも Harrison Weir の挿絵が付されている。同一の寓話の絵はどの版でも同じであるが、版により挿絵の数が異なる。以下の比較に用いたのは筆者の知る範囲では最も挿絵数の多い一八六七年刊の二二四ページ本(T<sup>2</sup>)である。T<sup>2</sup>と一致する挿絵が以下の一六話に

見られる。本書での寓話番号、寓話タイトル、ページとT<sub>2</sub>の番号とページを示す。ページも示したのは、両本とも寓話番号が付されていないので、対照が容易にできるといえるためである。

- (1) THE WOLF AND THE LAMB (p2) : T<sub>2</sub>(3,p3)
  - (2) THE DOG AND HIS SHADOW (p3) : T<sub>2</sub>(16,p11)
  - (3) THE LARK AND HER YOUNG ONES (p5) : T<sub>2</sub>(213,p151)
  - (8) THE WOLF AND THE CRANE (p13) : T<sub>2</sub>(6,p5)
  - (13) THE KID AND THE WOLF (p20) : T<sub>2</sub>(197,p137)
  - (24) THE FOX AND THE GOAT (p32) : T<sub>2</sub>(31,p21)
  - (29) THE DOG IN THE MANGER (p40) : T<sub>2</sub>(36,p25)
  - (30) THE MOUSE, THE FROG, AND THE HAWK (p41) : T<sub>2</sub>(90,p63)
  - (37) THE COCK \* AND THE JEWEL (p53) : T<sub>2</sub>(10,p7)
  - (38) THE VAIN JACKDAW (p54) : T<sub>2</sub>(64,p45)
  - (40) THE ONE-EYED DOE (p57) : T<sub>2</sub>(108,p77)
  - (44) THE WIND AND THE SUN (p64) : T<sub>2</sub>(243,p173)
  - (45) THE BEAR AND THE TWO TRAVELERS (p65) : T<sub>2</sub>(33,p23)
  - (51) THE EAGLE AND THE ARROW (p70) : T<sub>2</sub>(103,p73)
  - (57) THE OX AND THE FROG (p76) : T<sub>2</sub>(70,p49)
  - (72) THE QUACK FROG (p93) : T<sub>2</sub>(240,p171)
- \* なお二七番は COOK とあった誤植を正した。
- 以上一六図のうち、四図(11・24・44・45)はT<sub>1</sub>(一九二ページ本)・T<sub>3</sub>(二二六ページ本)にはない。
- 以下の七話の挿絵は Townsend 本と一致しない。
- (20) THE CROW AND THE PITCHER (p27) : T<sub>2</sub>(189,p131)
  - (28) THE HARE AND THE TORTOISE (p38) : T<sub>2</sub>(13,p9)

- (41) THE FOX AND THE CROW (p58) : T<sub>2</sub>(96,p67)
  - (42) THE HARES (p60) : T<sub>2</sub>(136,p97)
  - (43) THE HAWK, KITE, AND PIGEONS (p62) : T<sub>2</sub>(80,p57)
  - (63) THE NURSE AND THE WOLF (p83) : T<sub>2</sub>(285,p201)
  - (68) THE MILKMAID AND HER PAIL OF MILK (p89) : T<sub>2</sub>(111,p79・p80)
- 以上の五話は Townsend 本に挿絵がなく。(Townsend 本の番号・ページは省略)
- (10) THE ANTS AND THE GRASSHOPPERS (p15)
  - (19) A FOX AND A CRAB (p26)
  - (25) THE FOX AND THE STORK (p35)
  - (31) THE BOY AND THE FROGS (p44)
  - (32) THE SHEPHERD'S BOY (p45)

以上のように二八話中一六話の挿絵は Townsend 本、それも上記の三種の版の範囲内ではT<sub>2</sub>から採ったことがわかる。残る一二話の挿絵は何から採ったのかは不明とせざるを得ない。いずれも登場人物(動物)、背景の描き方がヨーロッパ風で、日本人の発想ではなさそうである。Townsend 本には、もともと挿絵数の多い、上の表で不一致とした一二図を付す版がある可能性もある。ならばすべてが Townsend 本から採用したとの推測も否定できないが、恐らくそれは成立しないだろう。少なくとも不一致のうち一〇話の絵は、以下の理由から Townsend 本に拠るのではないと推定される。Weir の絵はすべて枠なしで描かれている。一方一〇図(10・19・20・25・28・31・42・43・63・68)は枠付きである。これは Weir の筆によるのではないだろう。他の二図(32

・ 41) は何とも言いがたい。

### 【補論三】西垣堯則訳『伊蘇普物語二百話』の原本

西垣堯則訳の『伊蘇普物語二百話』は全二百話のうち、第一話から第一二六話までは、Stickney 本の全一二六話とタイトル、掲載順ともに完全に一致する。しかも Stickney 本の「イソップ伝」の翻訳も付けている。したがって、第一二六話までは Stickney 本を原本としているように見える。しかし詳細に調べるならば、それは否定しなければならない。

原英文と翻訳文を対照すれば、どの英書を底本としたかは容易に判明しそうである。しかしことはそう単純ではない。イソップ寓話の英書であれば、対応する寓話の内容はほぼ同じであり、英文の表現、行文もよく似ている。しかも翻訳文は、原文の逐語訳とは限らず、適宜語句を加えたり省いたりしていると思われる。また原文の直接話法を間接話法や状況説明の地の文に変換する、あるいはその逆もありそうである。登場する動物を変えたり、更には内容や教訓を改変する場合もある。そうすると翻訳と言うより改作に近くなり、どの英書に基づくかを判定するのは一層困難になる。以下では比較的明瞭な例を挙げて、原本を検討してみたい。

#### ① 第四三話「農夫と蛇」

第四三話「農夫と蛇」は、凍死しそうになった蛇を助けてやった農夫が生き返った蛇に逆にかみ殺されるといふ話である。ところが Stickney 本では前半は同じだが、

農夫をかもうとした蛇を農夫が殺してしまうという結末になり、西垣訳とは全く異なる。西垣が勝手に末尾を変えたのか。あるいは Stickney 本以外に基づいているのか。

当時の英書イソップの普及状況を考えると、利用できそうなのは James 本か Townsend 本である。James 本は農夫が蛇を殺すが、Townsend 本は農夫が殺される内容を持ち西垣本と同じである。更に以下に述べる点でも西垣本と Townsend 本とは一致する。

西垣本の特徴のひとつは「約言は原文を挿入し、対訳及び引用の趣味を以てせり」(「例言」というところにある。これはときに「約言」(寓話から導き出された教訓をまとめた一文)の原英文をそのまま引用することである。そしてこの第四三話での約言は以下の英文である。

The greatest benefits will not bind the ungrateful.

ここには誤植があるが、それを正せば Townsend 本の約言

The greatest benefits will not bind the ungrateful.

と一致する。

この第四三話に限ると、西垣本は Townsend 本を原拠としているとの推測が成り立つ。

#### ② 第五九話「鷲と狐」

第五九話「鷲と狐」は、鷲が狐の子を襲い、それを知った親狐が子狐の命乞いをする、しかし鷲は自分の雛と共に子狐を食う、親狐は鷲の巢のある木に火を付けて飛ばずに落ちて来た雛を食って仇を討つという話である。しかし Stickney 本では、子狐を食う前に火を付けられて、

驚は狐に赦しを乞い、狐はそれを受け入れ、双方共に無事に終わる。このように西垣本は Stickney 本とは大きく異なる。一方 Townsend 本は西垣本と同じである。西垣訳は Townsend 本の忠実な訳とはいえないが、狐が持つてくる火が、村人の祭壇に捧げたヤギの焼肉の燃えさしである点、狐が「親驚の見て居る前で」驚の雛を食う点など細部も一致する。

③ 第二話「狐と獅子」

①②から見ると、西垣本の各話の一つの原拠から採られている(①②の場合は Townsend 本)かに思われるが、そうとも限らない例として第二話「狐と獅子」を挙げることができる。

第二話の約言は

A hantance softens prejudices (ギリオドがない)

という誤植だらけの英文だがそれを正せば、Townsend 本 (T) の第二〇七話 THE FOX AND THE LION. の

Acquaintance softens prejudices.

と一致することは明かだ。一方 Stickney 本には約言がない。ところが本文は Stickney 本に基づいているのである。いま最初の部分だけ対照させてみよう。

(西垣訳)

或る日一匹の小狐が穴から出まして遊んで居ますと一匹の獅子が雷の様に吼へながら遣つて来ましたから、狐はあわてゝ樹の蔭に匿れて言ひますには。

(Stickney 本)

A little Fox was out playing one day, when a Lion came

roaring along. "Dear me," said the Fox, as he hid behind a tree,.....

西垣訳は原文を外れていない翻訳といえるだろう。一方 Townsend 本は以下のとおりである。

(Townsend 本)

A Fox who had never yet seen a Lion, when he fell in with him by a certain chance for the first time in the forest,.....  
このように Townsend 本は西垣訳とは全く表現が異なる。

おそらく西垣は Townsend 本と Stickney 本を読んで、地の文だけの前者と、狐の発言で話が進む後者とを比べて後者を選び、約言は後者にはないので、前者から採ったのだらうと思われる。

④ 約言の一致

③のように約言が一致しても本文が一致しない例外的なケースもあるが、①で見たように約言の一致は原拠確定の一つの目安になる。そこで第二二六話までの範囲で西垣本が引用する約言が Stickney 本、Townsend 本のそれと一致するか否かを調査した。その結果は次のとおりである。(アラビア数字は西垣本の寓話番号)。

西垣本には七〇話に約言がある。それを分類したのが A から F である。

A 西垣本の約言と Townsend 本、Stickney 本のそれが一致する (西 || T || S)。三話

4・115・121

B 西垣本の約言と Townsend 本のそれが一致するが、

Stickney 本とは一致しない (西  $\parallel$  T  $\#$  S)。一七話  
 11・21・25・27・37・44・60・62・64・69・72・95・  
 105・117・118・120・123

C 西垣本の約言と Townsend 本のそれが一致し、  
 Stickney 本には約言がない (西  $\parallel$  T)。二七話

2・12・26・28・29・33・40・43・45・58・66・70・  
 76・77・78・81・86・91・92・93・99・101・108・109・  
 110・113・119

D 西垣本の約言と Stickney 本のそれが一致するが、  
 Townsend 本とは一致しない (西  $\parallel$  S  $\#$  T)。四話

1・7・30・111

E 西垣本の約言と Stickney 本のそれが一致し、  
 Townsend 本には約言がない (西  $\parallel$  S)。一六話

6・8・14・17・22・38・49・51・55・75・82・89・  
 102・106・116・122

なお 14 は Stickney 本では約言扱いでない文を西垣本では約言扱いしている例である。

F 西垣本の約言が Stickney 本の約言に一致し、  
 Townsend 本には該当話自体がない。(西  $\parallel$  S)。三話

67・87・88

以上でまずわかるのは、西垣本の約言は、Townsend 本か Stickney 本、あるいはその両本の約言と必ず一致するということである。西垣本だけの約言はない。それを確認した上で、西垣本の約言と Townsend 本、Stickney 本のそれが一致する話数を示すと以下のとおりとなる。

Townsend 本と一致：四七話 (A + B + C = 47)

Stickney 本と一致：二六話 (A + D + E + F = 26)。A については、Stickney 本自体が Townsend 本に基づく場合があることを考慮する必要がある)

以上の考察からは③で述べたように、西垣本が Townsend 本、Stickney 本両本を読み比べたうえで、いずれかを選択したといえる。先に述べたように、訳文から原拠を導きだすのは難しい問題があるが、西垣訳はこの二つの英書からの翻訳とみて不都合は見当たらない。

なお、約言のない五六話を分類したのが以下である。  
 G 約言が西垣本にはないが、Townsend 本、Stickney 本にはある。ただし、両本の約言は異なる。二話

36・56

H 西垣本・Townsend 本には約言がないが、Stickney 本にはある。八話

24・34・71・84・85・90・98・107

H 三本とも約言がない。三五話

3・10・13・15・16・18・19・20・31・35・39・41・  
 46・47・48・50・52・53・54・57・59・61・63・65・  
 68・73・79・80・83・94・103・112・124・125・126

J 西垣本・Stickney 本に約言がなく、Townsend 本に該当話自体がない。九話

5・9・32・74・96・97・100・104・114

K 西垣本に約言なく、Stickney 本に約言があるが、Townsend 本には該当話自体がない。二話

23・42

⑤ 第一二七話以降

Sickney 本に該当話のない第一二七話以降の七四話の約言についても④同様の調査を行ってみたい。それを④同様に分類すると、以下ようになる。

L 西垣本の約言が Townsend 本のそれに一致する。

### 三七話

127 〃 129 〃  
155 〃 157 〃  
188 〃 189 〃  
191 〃 193 〃  
158 〃 161 〃  
131 〃 132 〃  
195 〃 198 〃  
162 〃 168 〃  
134 〃 138 〃  
200 〃 169 〃  
142 〃 145 〃  
175 〃 147 〃  
177 〃 150 〃  
179 〃 151 〃  
183 〃 153 〃  
186 〃

M 西垣本・Townsend 本に約言がない。三七話

130 〃 133 〃  
160 〃 163 〃  
190 〃 192 〃  
167 〃 170 〃  
135 〃 137 〃  
194 〃 196 〃  
174 〃 176 〃  
143 〃 144 〃  
176 〃 148 〃  
178 〃 149 〃  
180 〃 152 〃  
182 〃 154 〃  
184 〃 156 〃  
185 〃 159 〃  
187 〃

要するに第一二七話以降は、約言の有無、約言の文言に関しては、完全に Townsend 本と一致するのである。

① 〃 ⑤の検討結果をまとめると、次のようにいえる。

・西垣本の原拠は Townsend 本と Sickney 本である。この二つの英書に含まれない寓話は西垣本にはない。

・第一二六話まではこの二つの英書を読み比べたうえで、どちらかの本文、約言を採用している。

・第一二七話以降は Townsend 本を原拠としている。

【補論四】『家庭教育小学脩身はなし』『家庭教育幼年脩身はなし』『新訳伊蘇普物語』に関する覚え書き

積善館から出された渡辺松茂『家庭教育小学脩身はなし』『家庭教育幼年脩身はなし』及びこの二書の改題本である鈴木青溪『新訳伊蘇普物語』の三書につき徹底

した調査はまだなし得ていないが、現在のところ気づいた点をいくつか明らかにしておく。以下この三書を『小学』『幼年』『新訳』と略記する。

### ① 挿絵について

『小学』は全一二九話中四八話につき四八の挿絵を載せる。これらは一ページが縦二列横三列の六コマに区画された紙の一コマに一図ずつという体裁で描かれている。裏は白紙である。計八枚となるが、これらはページ付けされていないので、適当な箇所に入して製本することが可能である。それぞれの挿入された箇所と挿絵の寓話番号をアラビア数字で示すと以下になる。

|               |     |     |     |     |     |     |
|---------------|-----|-----|-----|-----|-----|-----|
| 第一紙（四ページの後）   | 5   | 6   | 8   | 11  | 12  | 13  |
| 第二紙（一八ページの後）  | 16  | 17  | 26  | 27  | 30  | 31  |
| 第三紙（三六ページの後）  | 33  | 34  | 41  | 42  | 43  | 47  |
| 第四紙（五〇ページの後）  | 48  | 49  | 60  | 63  | 65  | 69  |
| 第五紙（八〇ページの後）  | 70  | 73  | 74  | 77  | 79  | 81  |
| 第六紙（九〇ページの後）  | 83  | 84  | 85  | 86  | 88  | 89  |
| 第七紙（九八ページの後）  | 90  | 91  | 92  | 94  | 95  | 99  |
| 第八紙（一二〇ページの後） | 117 | 119 | 122 | 123 | 124 | 129 |

これらの挿絵を Townsend 本（最も挿絵数の多い二二四ページ本）のそれと比較すると、四二図が Townsend 本の模写あるいは同じ構図と判明する。多少の改変がとくに見られ、特に人物が登場する場合に服装を和装に変えるのが目立つ。読者に舞台を日本と認識させるためであらう。

Townsend 本と全く異なるのは第一二・一三・三〇・

六五・八八・九四話のの挿絵六図である。このうち、第一二話は「ローヤル第三」、第三〇・八八話は「ナショナル第二」、第六五話は「ナショナル第三」と、目録に本文の原典が示されている。「ローヤル」「ナショナル」はイギリス、アメリカの教科書であり、これらの教科書に掲載されていた挿絵に基づいたと思われる。第一三・九四話の挿絵については、原画があるのか、あるとしてそれは何かは不明としなければならない。

『幼年』の挿絵四七図の体裁も『小学』と全く同じである。四七図と一図少ないのは、第八紙には五図しかないからである。これもそれぞれの挿入された箇所と挿絵の寓話番号をアラビア数字で示しておこう。

|               |     |     |     |     |     |     |
|---------------|-----|-----|-----|-----|-----|-----|
| 第一紙(二ページの後)   | 1   | 2   | 5   | 7   | 16  | 17  |
| 第二紙(一八ページの後)  | 19  | 21  | 22  | 24  | 27  | 28  |
| 第三紙(二八ページの後)  | 30  | 32  | 40  | 41  | 44  | 45  |
| 第四紙(四二ページの後)  | 46  | 49  | 58  | 59  | 61  | 63  |
| 第五紙(六〇ページの後)  | 67  | 68  | 69  | 71  | 73  | 80  |
| 第六紙(七六ページの後)  | 87  | 92  | 95  | 99  | 109 | 110 |
| 第七紙(一〇〇ページの後) | 118 | 121 | 125 | 126 | 129 | 147 |
| 第八紙(一二八ページの後) | 148 | 149 | 150 | 151 | 152 |     |

四七図すべて『Townsend』本の模写あるいは構図の一致する絵である。人物をしばしば和装にするのも『小学』と同様である。

以上のように『小学』『幼年』ともにほとんどの挿絵の原拠は『Townsend』本にある。先に見たように、『Townsend』本にはいくつかの版があるが、原拠が、挿絵を五〇図し

か載せていない版であるはずはなく、筆者が確認できた範囲でいうならば、一一四図を載せる二二四ページ本と考えられる。

『幼年』を「上」とし、『小学』を「下」として合冊した改題本である『新訳』の初版は『幼年』の四七図、『小学』四八図すべてを取り込んでいる。ただし後述するように、版によって挿絵の数が異なる。

## ② 原本について

『小学』の四話には次のように出典が明記されている。

第一二話「狐と鶴」(「ローヤル第三八十四ページ」)

第三〇話「懶惰鼠」(「ナショナル第二百三十ページ百三十四ページ」)

第六五話「二頭の家犬」(「ナショナル第三五十一ページ」)

第八八話「二羽の鷓鴣」(「ナショナル第二五十七ページ」)

「ローヤル」は Royal Reader、「ナショナル」は National Reader というそれぞれイギリス、アメリカの初等教科書である。この四話以外には出典は示されていない。『幼年』の全一五二話の出典も示されていない。しかし①で見たように、挿絵に関していえば、上記の四話及び『小学』の第一三・九四話以外の八九話は『Townsend』本に基づく。翻訳文の原拠を説明するのは、先に述べたように困難な点があるが、この八九話は挿絵だけでなく本文も『Townsend』本に基づくと思わして支障はなさそうである。では『小学』『幼年』で挿絵のない一八六話について

はどうか。このうち九話(『小学』の第一三・一四・二二・二八・三〇・六七・六八・八八話、『幼年』の第三三話)は Townsend 本に該当話がない。『小学』第三三話はカラスが孔雀の羽根を身につけて、孔雀からも他のカラスからも仲間はずれにされる話で、仮名草子の『伊曾保物語』、James 本にはある。しかし『小学』第三三話ではカラスは古寺の塔に住む、また他のカラスばかりではなく鶏やガチョウにも軽蔑されるなど他本とは異なり、これらが原拠とは見なせない。他の八話はいずれもインソップ寓話とは認めがたい話で、これらも原拠不明である。

この九話を除く一七七話は Townsend 本に該当話がある。現在のところ、詳細な検討には至っていないので、原拠の可能性があるとだけ言っておく。

### ③ 『新訳伊蘇普物語』の諸版について

『新訳』はよく読まれたのであろう、明治三六年六月には第一一版が出されている。初版が明治二五年だから、毎年のように版を重ねていたようだ。筆者が見たのは初版と第一一版だけだが、この二版の間にはいくつかの相違があるので、それを指摘しておく。

既に述べたように、『新訳』は『幼年』と『小学』を合冊にした改題本である。必要な変更はされているが、本文自体は、『幼年』『小学』と同一の版を使ったかのように字配りを含め全く変わらない。その点では初版と第一一版とに差異はない。しかし以下の点ではこの二つの版の間に相違が見られるのである。

### 初版

A 序文、前書きの類が一切ない。

B 『幼年』『小学』の挿絵をすべて採用し、本文中に適宜組み入れている。

C 『幼年』の第一ページの内題等「家庭幼年脩身はなし 黄薇 渡辺松茂著」(図一)を「新伊蘇普物語上 青溪散史訳」(図二)と変更する(筆者の見た初版本は「伊蘇普物語」のルビ部分が綴じ目にかかつて読めない)。  
『小学』の第一ページの内題等「家庭小学脩身はなし 黄薇 渡辺松茂訳述」を「新伊蘇普物語下 青溪散史訳」と変更する。

D 奇数ページ上欄に「教育全書」と印刷する。

E 「上」の末尾に「新伊蘇普物語目録上終」、「下」の末尾に「新伊蘇普物語目録下終」と印刷する。

### 第一一版

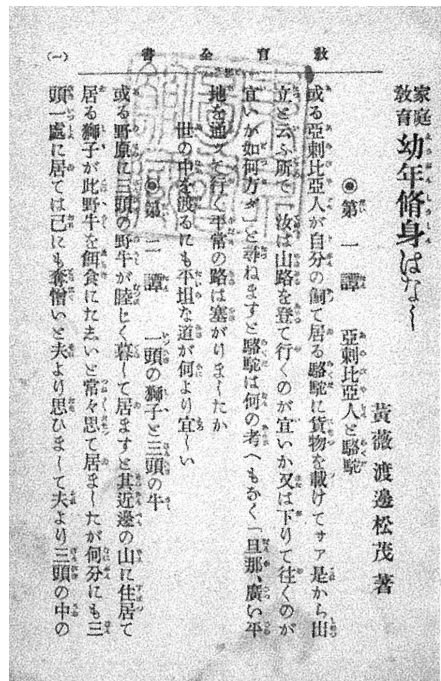
A 「大阪府尋常中学校教諭吉見経綸君」による「新訳伊蘇普物語序」、「訳者青溪散史」の「序」(筆者が見た第一一版はこのタイトル部分が欠けている。仮に「序」としておく)を付す。

B 『幼年』の挿絵は第三紙、第六紙のみを採用する。

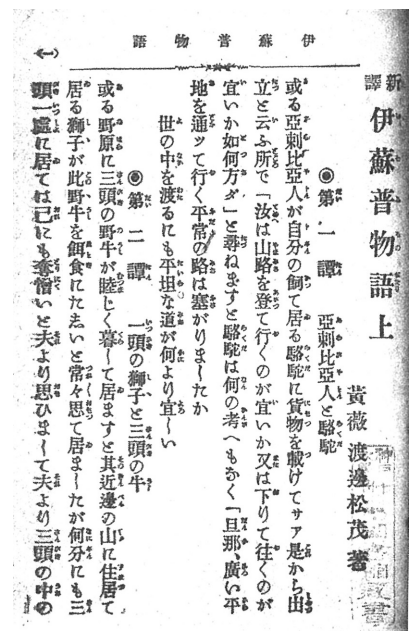
『小学』の挿絵はすべて採用する。そしてこの一〇紙を目録の後、つまり本文の前にまとめて組み入れる。

C 『幼年』の第一ページの内題等「家庭幼年脩身はなし 黄薇 渡辺松茂著」(図一)を「新伊蘇普物語上 黄薇 渡辺松茂著」(図三)と内題だけ変更する。『小学』の第一ページの内題等「家庭小学脩身はなし 黄薇 渡

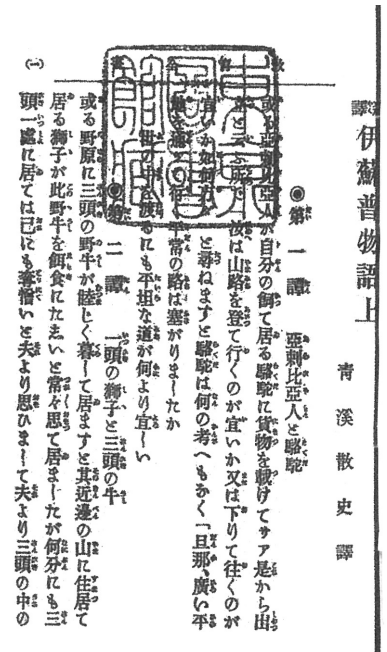
図一 『家庭教育幼年脩身はなし』 第二ページ



図三 『新訳伊蘇普物語』 第二版 上第一ページ



図二 『新訳伊蘇普物語』 初版 上第一ページ



辺松茂訳述」を「<sup>新</sup>伊蘇普物語下 黄薇 渡辺松茂訳述」と内題だけ変更する。

D 奇数ページ上欄に「伊蘇普物語」と印刷する。

E 「上」の末尾に「<sup>新</sup>伊蘇普物語上」、「下」の末尾に「<sup>新</sup>伊蘇普物語下」と印刷する。

初版にあるDの「教育全書」はもとの『幼年』『小学』にあつたものであり、ここは第一一版のように「伊蘇普物語」とするのが本書にはふさわしいだろう。Eの初版の「目録」は不要であり、これも第一一版のように削除されるべきだ。この二点はより適切な形に初版を修正したと見なすことができる。一方不可解なのはCである。編訳者を初版では渡辺から鈴木青溪に変えている。そしてこの変更は、『新訳』が鈴木青溪の編訳書であるという建て前からは必要不可欠である。にも拘わらず第一一版では元に戻っている。どうも渡辺と鈴木の間には複雑な事情があつたのかと想像される。この稿では二つの版を対照させたただけだが、更に多くの版を比較するならば解明が進むかと思われる。

【補論五】『ポケット伊蘇普物語』『ポケット新訳イソップ物語』と鈴木青溪『新訳伊蘇普物語』

中川柳崖『ポケット伊蘇普物語』、馬場直美『ポケット新訳イソップ物語』は、鈴木青溪（実際は渡辺松茂訳）『新訳伊蘇普物語』の影響を大きく受けている。特に中川本はその傾向が顕著で、鈴木本の改編本と称してもよいほどである。その証となる事実を指摘しておく。

#### ① 中川本・馬場本の採用話

中川本の全一五〇話、馬場本の全二五七話ははすべて鈴木本に収められている話である。中川本の三話（第四四話「魚売と門番」・第七〇話「国王と蜘蛛と蠅」・第九七話「好事な小供」）、馬場本の三話（第一九五話「破れた門」・第一九六話「魚売と門番」・第一九九話「王様と蜘蛛と蠅」）は、鈴木本以外の先行イソップ寓話集にはない話である。中川本、馬場本が鈴木本を参照していることは確かである。

#### ② 掲載順

また掲載順においても、以下のように両本には鈴木本との相関が見られる。特に馬場本にその傾向が強い。

②-1 中川本、馬場本のそれぞれ連続する数話が鈴木本の対応する寓話でも連続する、あるいはほぼ連続するケースがしばしばある。連続する四話以上の場合を示す以下ようになる。

中川本 鈴木本

74 77 (四話) 下47 50

馬場本 鈴木本

56 62 (七話) 上131 134 136 138

(鈴木本の上135を飛ばしている)

70 74 (五話) 下1 5

81 84 (四話) 下18 21

88 92 (五話) 上1 5

105 110 (六話) 上37 40 42 43

(鈴木本の上41を飛ばしている)

111 上 147 150 152  
115 (五話)

(鈴木本の上151を飛ばしている)

116 126 (一一話) 下 73 74 76 78 80 84 86

(鈴木本の下75 79 85を飛ばしている)

149 161 (一三話) 上 74 78 80 85 88 89

(鈴木本の上79 86 87を飛ばしている)

連続する三話以下ならば他にもあるが省略する。

② 2 中川本、馬場本のそれぞれ連続する数話が鈴木本では連続しないが、番号が近い。掲載順も鈴木本にほぼ準じている。

中川本 鈴木本

88 105 (一八話) 上 23 43 中の一八話

106 141 (九話) 上 48 60 中の九話

118 140 (二三話) 上 86 144 中の二三話

馬場本 鈴木本

140 148 (九話) 上 51 65 中の九話

162 194 (三三話) 上 96 144 中の三三話

196 228 (三五話) 下 22 72 中の三五話

231 255 (二五話) 下 101 129 中の二五話

具体的には今号の「タイトル・原拠・同定」編を参照していただきたい。これらの相関を偶然と見なすことはできない。

### ③ 神名の訳

訳語の類似する例を神名に採って挙げてみる。英語のイソップ寓話にはローマ神話の神名が登場する。これらの神名をどう訳すかには、原音どおりにする、あるいは

日本の神仏にあてはめるといった訳者の工夫が表れるので、いろいろな訳になる。それを中川、馬場がどう訳しているか、鈴木本と比較してみる。英語のイソップ寓話集で神名が登場する寓話を中川本は五話、馬場本は四話収めている。英語のイソップ寓話集、例えば Townsend 本では次の五話がこれに当たる。寓話番号は Townsend の一九二ページ本に拠る。

(158) The Images of Mercury and the Carpenter

(210) The Peacock and Juno

(213) The Seller of Images

(298) The Camel and Jupiter

(303) The Cat and Venus

Townsend 本第一五八・二二三話には Mercury、第二一〇話には Juno、第二九八話には Jupiter、第三〇三話には Venus が登場する。これらの神の名がどう訳されているかを調べると次の結果を得る。参考のために Townsend 系の福沢英之助、田中達三郎、雨谷一菜庵、百島操の訳も示す。

Mercury (中川本第九二話・馬場本第三六話)

○中川「福神」・馬場「福神／大黒様」

○鈴木「福神」

○福沢(神名なし)・田中「福大黒」・雨谷「恵比寿様(原名マーキュリー神)」・百島(該当話なし)

Mercury (中川本第二四話・馬場本第一五二話)

○中川「福神」・馬場「福の神／大黒」

○鈴木「福神」

○福沢（該当話なし）・田中「福大黒」・雨谷「福の神（マーキュリー）」・百島（該当話なし）・

Juno（中川本第七九話・馬場本該当話なし）

○中川「愛神」・馬場（該当話なし）

○鈴木「愛神」

○福沢（該当話なし）・田中「ジュノー権現」・雨谷「ジュノといふ女神様／ジュノ神」・百島（該当話なし）

Jupiter（中川本第一一話・馬場本第一四四話）

○中川「歳神」・馬場「神様」

○鈴木「歳神」

○福沢（該当話なし）・田中「神／ジュピター大神」

雨谷「ジュピター神」・百島「ジュピター神」・

Venus（中川本第一二五話・馬場本第一六四話）

○中川「愛神」・馬場「神様」

○鈴木「愛神」

○福沢（該当話なし）・田中「ベナス権現」・雨谷「ヴェナス神」・百島（該当話なし）

以上に見るように、中川の訳は鈴木本の訳に完全に一致する。一方馬場訳は、この点では鈴木本と類似しているとは言いがたい。

#### ④ 表現の類似

鈴木本の本文を中川本、馬場本が引き継いでいると思われる箇所がまま見られる。例えば鈴木本下第六九話「獅子と鼠」（中川本第二九話、馬場本第一話）が挙げられる。この寓話の鈴木本の挿絵は Townsend 本の模写である。

るので、本文も Townsend 本に拠ったと思われる。ただし忠実な逐語訳ではない。鈴木・中川・馬場の三本の行文、表現はよく似ている。煩を厭って末尾だけを示そう。

（鈴木本）

私が偽言を吐かないことが今解りましたらう

如何なものでも悔めることは出来ませぬ

（中川本）

私が偽を吐かないことがお解りになったでせう。

△幾何小なものでも悔めることは出来ません。

（馬場本）

私が偽りを申さぬことは只今お分りになりましたらう。

仮令身分の賤しい者のいふことでも決して馬鹿には出来ぬものです。

Townsend 本は次のとおりである。

（Townsend 本）

…… but now you know that it is possible for even a Mouse to confer benefits on a Lion.

Townsend 本には三者の訳にある「嘘をつく」に当たる表現はないし、訓語もない。鈴木は訓語（傍線部分）を加えている。中川・馬場も同様で、しかもその訓語がよく似ている。とりわけ中川本にその傾向が強い。

#### 【補論六】『イソップお伽噺』の依拠した本

巖谷小波『イソップお伽噺』の依拠した本は何か。巖谷は原語をかなり自由に改作していると思われるので、

表現上の一致から原本を探るのはかなり困難である。そこでこれが収載する寓話と、先行のイソップ寓話集の収載話とがどの程度一致するかを調べると、一致度の最も高い本として上田万年『新訳伊蘇普物語』が挙げられる。両者ともに一六〇話を収めるが、巖谷本の三話（73・158・159）以外は上田本にもある。注目すべきは上田本で初めて日本に紹介された二四話すべてを巖谷本が収めていることである（巖谷本の寓話番号をアラビア数字で示すと以下のとおり。18・27・29・30・33・38・41・47・50・55・60・64・66・74・84・87・91・101・115・124・142・148・155・156）。巖谷が上田とは独立にこれらの話を知り得たとは想像し難い。当然巖谷は四年前に発行され、よく読まれていた上田本を手にしていたはずである。

巖谷本が上田本を参考にしていたことは次の事実からもいえる。両本の寓話の掲載順を比較すると、奇妙な相関を見出すことができる。以下これを説明したい。アラビア数字はそれぞれの本の寓話番号。

① 巖谷本の連続する数話が上田本の対応する寓話でも連続するケースがしばしばある。連続する五話以上の場合を示すと以下になる。

| 巖谷本         | 上田本         |
|-------------|-------------|
| 39<br>（五話）  | 21<br>（五話）  |
| 152<br>（五話） | 151<br>（五話） |
| 139<br>（五話） | 160<br>（五話） |
| 134<br>（五話） | 135<br>（五話） |
| 128<br>（五話） | 130<br>（五話） |
| 132<br>（五話） | 126<br>（五話） |
| 143<br>（五話） | 156<br>（五話） |
| 157<br>（六話） | 146<br>（六話） |

連続する四話以下ならば、更にいくつもあるが省略する。

② 巖谷本の連続する数話が上田本の対応する寓話では逆順となるケースがある。

巖谷本 上田本

|              |              |
|--------------|--------------|
| 57<br>（二〇話）  | 66<br>（二〇話）  |
| 69<br>（四話）   | 74<br>（四話）   |
| 114<br>（一〇話） | 121<br>（一〇話） |
| 122<br>（一〇話） | 112<br>（一〇話） |

巖谷本が114・122で一〇話となるのは、第一一九話に二話が含まれているからである。

③ 巖谷本の連続する数話が上田本の対応する寓話では連続しないが、番号が近い。掲載順も上田本に準じている。

巖谷本 上田本

|              |              |
|--------------|--------------|
| 74<br>（一四話）  | 75<br>（一四話）  |
| 87<br>（一四話）  | 77<br>（一四話）  |
|              | 79<br>（一四話）  |
|              | 80<br>（一四話）  |
|              | 82<br>（一四話）  |
|              | 84<br>（一四話）  |
|              | 86<br>（一四話）  |
|              | 88<br>（一四話）  |
|              | 90<br>（一四話）  |
|              | 91<br>（一四話）  |
|              | 93<br>（一四話）  |
|              | 95<br>（一四話）  |
|              | 98<br>（一四話）  |
|              | 99<br>（一四話）  |
| 88<br>（二三話）  | 76<br>（二三話）  |
| 101<br>（二三話） | 78<br>（二三話）  |
|              | 81<br>（二三話）  |
|              | 83<br>（二三話）  |
|              | 85<br>（二三話）  |
|              | 87<br>（二三話）  |
|              | 89<br>（二三話）  |
|              | 92<br>（二三話）  |
|              | 94<br>（二三話）  |
|              | 96<br>（二三話）  |
|              | 97<br>（二三話）  |
|              | 101<br>（二三話） |
|              | 103<br>（二三話） |

連続する三、四話程度ならば他にもあるが省略する。

④ 巖谷本の連続する数話が上田本の対応する寓話では連続しないが、番号が近い。

巖谷本 上田本

|             |             |
|-------------|-------------|
| 102<br>（九話） | 102<br>（九話） |
| 110<br>（九話） | 104<br>（九話） |
|             | 106<br>（九話） |
|             | 110<br>（九話） |
|             | 108<br>（九話） |
|             | 109<br>（九話） |
|             | 111<br>（九話） |
|             | 107<br>（九話） |
|             | 105<br>（九話） |

連続する三〇五話程度ならば他にもあるが省略する。

以上①④の相関は偶然とは考えがたい。右に挙げた巖谷本の寓話だけでも八六話になる。ここに省略したものを加えると、巖谷本の寓話番号の多くは何らかの形で上田本の番号と関連づけられるのである。また、総じて巖谷本の寓話番号と上田本のそれは近い。つまり上田本の前半、中間、後半にある話は、巖谷本でもおよそそのように配置されているのである。上述の点を考え合わせれば、巖谷が上田本を主たる参考図書としていることは疑えない。付け加えておくと、この指摘を以て巖谷本を貶めるつもりはない。巖谷本の眼目は、知られていない寓話を紹介することではなく、イソップ寓話を新たな語り口で読者に提供するところにあると思うからである。

参考図書が他にもあることは、上田本にない寓話を三話載せていることから確かである。これらは先行のイソップ寓話集から得たものと思われるが、現在のところは詳細な調査には至っていない。

# 注

一 吉見孝夫「明治期の雑誌に載ったイソップ寓話」『イソップ資料』第一一〇号、二〇一八年一〇月

吉見孝夫「明治期の雑誌に載ったイソップ寓話 補遺」『イソップ資料』第一一二号、二〇一九年一二月

吉見孝夫「明治期の寓話集に載ったイソップ寓話」

『イソップ資料』第一一二号、二〇一九年一二月

一 吉見孝夫「大久保夢遊、竹村友治郎編『伊曾保物語』

の出版」『イソップ資料』第七号、二〇一六年三月

三 三宅興子「明治初期に翻訳されたイギリス『イソップ寓話』二書をめぐって」『イソップ絵本はどこからきたか 日英仏文化の環流』三弥井書店、二〇一九年五月

四 「渡部温」の読みを「わたなべおん」とする研究者もいるが、『ローマ字雑誌』第二三三号（明治二〇年四月）の「幹事矢田部良吉君の報告」に「Watanabe Tazunu kun」とあるのに従う。

五 木村毅監修『明治前期書目集成 第六分冊』（明治文献、一九七二年）

六 注五文献に同じ。

七 暁斎の挿絵については下記の文献が詳しい。

定村来人「河鍋暁斎とイソップ物語——一八七〇年代における新たな試みと展開」『浮世絵芸術』一七八号、二〇一九年七月

八 中田敬義の姓名の読みについては下記の文献に根拠が示されている。

吉見孝夫「随感『北京官話伊蘇普諭言』の訳者中田敬義に関する覚書」『イソップ資料』第四号、二〇一四年三月

九 下記の文献に本文の翻刻がある。

吉見孝夫「明治期の雑誌に載ったイソップ寓話」『イソップ資料』第一一〇号、二〇一八年一〇月

一〇 雑誌掲載の註釈等については下記の文献がある。

吉見孝夫「明治期の雑誌に載ったイソップ寓話 補遺」(『イソップ資料』第一二号、二〇一九年十二月)

一 島鮮堂の「明治少年お伽噺」「絵入日本お伽噺」中のイソップ寓話改作については下記の文献がある。

吉見孝夫「明治期の寓話集等に載ったイソップ寓話」

(『イソップ資料』第一二号、二〇一九年十二月)

二 『お伽百題』中のイソップ寓話については注一文献参照。

三 花間隆・難波博子「意拾喩言 対照表・新訳伊蘇普物語 対照表」(『イソップ資料』第九号、二〇一七年四月)